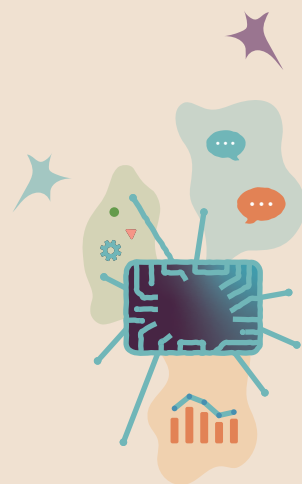


ポスターセッション



2月28日(土)

【ポスター掲示時間】 12:30-14:15

【ポスターセッションコアタイム】 13:00-14:00

【会場】 良心館 2階 RY205



FD・SDに関する情報収集、参加者間の交流を目的として、ポスターセッションが行われました。大学コンソーシアム京都加盟大学・短期大学の教員・職員・学生が実施する特色ある教育に関する取り組みを発表しました。



1. 京都薬科大学

テーマ	市民組織と協働で行う地域児童を対象とした理科実験講座の取り組み ～身近な夏の不思議体験 2025 イン 山科～	
発表代表者	林 美沙: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教	
連名発表者	高尾 郁子: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 高田 哲也: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 徳山 友紀: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助手 金瀬 薫: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 岩崎 宏樹: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 石川 誠司: 京都薬科大学 学生実習支援センター 講師 平山 恵津子: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 木村 徹: 京都薬科大学 学生実習支援センター 准教授 山口 貴: 京都薬科大学 企画・広報課 久保 亜未: 京都薬科大学 企画・広報課 武上 茂彦: 京都薬科大学 学生実習支援センター 教授	
キーワード	地域連携活動	市民協働
	科学体験	理科実験
発表の概要	<p>京都薬科大学では 2011 年度より、地域連携活動の一環として山科区の小学生を対象に理科実験講座を開催している。本講座は身近な科学現象を題材に、実験を通して理科への興味を引き出し、その関心を継続させることを目的とする。さらに、市民組織と協働し地域とのつながりを深めながら運営している。</p> <p>2025 年度は「水」をテーマに、「手でつまんで持てる水！容器がいない水を作ろう」、「水が消えた！？水を吸う魔法の粉」の二つの実験を行った。対象は小学 4～6 年生で午前・午後の 2 回に分けて、計 94 名が参加した。市民組織の方々にはサポートスタッフとして児童の補助や安全管理を担っていただいた。</p> <p>本発表では、サポートスタッフと児童の反応を中心に具体的な取り組みと支援内容を報告し、地域連携活動における科学教育の成果と課題について考察する。</p>	

市民組織と協働で行う地域児童を対象とした理科実験講座の取り組み ～身近な夏の不思議体験 2025 イン 山科～

○林美沙¹、高尾郁子¹、高田哲也¹、徳山友紀¹、金瀬薫¹、岩崎宏樹¹、石川誠司¹、平山津洋子¹、木村徹¹、山口真¹、久保亜未²、武上茂彦²
(¹:京都薬科大学 学生実習支援センター、²:京都薬科大学 企画・広報課)

背景・目的

京都薬科大学では2011年度より、地域連携活動の一環として山科区の小学生を対象に理科実験講座を開催している。本講座では身近な科学現象を題材に、実験を通して理科への興味を引き出し、その関心を継続させることを目的とする。さらに、市民組織と協働し地域とのつながりを深めながら運営している。

本年度は、「水」をテーマに二つの実験を行った。市民組織の方々はサポートスタッフとして児童の補助や安全管理を担っていた。本発表では、サポートスタッフと児童の反応を中心に具体的な取り組みと支援内容を報告し、地域連携活動における科学教育の成果と課題について考察する。



2025年度 実施内容

実施日 : 2025年7月27日(日)
実施時間 : 各回2時間(午前、午後の2部制)
参加状況 : 小学4～6年の児童94名(午前:47名、午後:47名)、サポートスタッフ23名、本学職員8名
協働団体 : 山科区「はくくみ」ネットワーク実行委員会
実験内容 : 「つかめる水」と高吸水性ポリマーを用いた2種類の実験を実施した。体験とデモンストレーションを通して、身近な水の性質を学ぶ構成とした。
運営体制 : 児童4～5名に対してサポートスタッフ1～2名を配置し、安全に配慮した体制とした。

2025年度 実験内容

実験1: 手でつまんで持てる水! 容器がない水を作ろう

アルゲン酸ナトリウムと乳酸カルシウムを反応させ、表面に不溶性のアルゲン酸カルシウムの膜をつくることで、「つかめる水」を製作した。



スタッフによる実験デモ内容

実験1の導入として、何も入っていないように見える水の入ったボールの中から、あらかじめ用意した「つかめる水」を取り出す「出現マジック」のようなデモを行っていただいた。



2025年度 実験内容

実験2: 水が溜めた? 水を吸う魔法の粉

携帯用トイレから取り出した高吸水性ポリマーを用いて吸水性を観察した。さらに、着色した高吸水性ポリマーを使用し芳香剤を製作した。



スタッフによる実験デモ内容

①どのようなものか不明な見た目が似ている2種類の白い粉(A: 乳酸カルシウム、B: 高吸水性ポリマー)を児童に見せた後、水の入った紙コップにそれぞれ粉を入れ、どのような変化が起きるか児童に予想させた。その後、紙コップの中身をボールにひっくり返してどうなるか観察させた。
②スポンジと高吸水性ポリマーを用いて、吸水性と保水性の違いを比較した。保水性の弱いスポンジからは水が出てくる様子を示し、その後、児童自身が紙おむつに水を流し入れ、触ったり絞ったりすることで水が出てこないことを体感し、両者の保水性の違いを確認した。

市民組織との協働・支援内容について

本講座は、市民組織と協働し、地域と連携して運営している。市民組織の方々には、当日のサポートスタッフとして、児童の実験補助や安全管理に加え、実験デモンストレーション(デモ)を行っていただいている。

デモは、児童の興味や関心を高めるだけでなく、児童とスタッフのコミュニケーションを促し、講座全体の理解を支える導入に役立てて位置付けている。これらの支援を講座当日に安定して行えるよう、事前に打ち合わせとワークショップ(リハーサル)を実施し、目的・役割分担・進行・安全上の留意点を共有しながら、支援の質(支援力)を高めている。

打ち合わせ

市民組織の方と実験講座の目的や開催日時、内容等について確認し、前年の実施を踏まえて、運営面や児童支援の改善点を共有した。

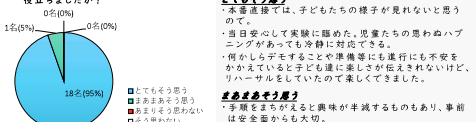
ワークショップ(リハーサル)

当日の児童支援を円滑に行えるよう、市民組織の方々に当日の流れに沿って実験を実際に体験していただいた。
体験を通して、手順の要点や児童がつまづきやすい場面、声掛けや安全上の注意点を確認した。さらに、本学職員によるデモの発表を見ていただき、導入の狙いと見せ方を理解してもらうことで、当日の支援方向上につなげた。

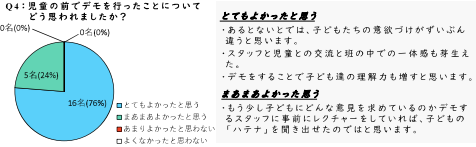


サポートスタッフの講座当日アンケート結果-1

Q3: ワークショップ(リハーサル)は役に立ちましたか? (回答者: 21名/23名 回収率: 91%)



Q4: 児童の前でデモを行ったことについてどう思われましたか?



サポートスタッフの講座当日アンケート結果-2

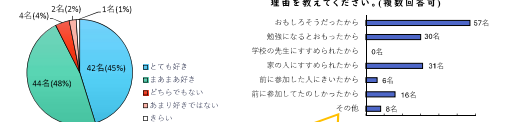
「身近な夏の不思議体験 2025 イン 山科」について良かった点、改善したら良い点など

・理科が好きではない子どもも来ていたが、最後は実験で楽しかった。
・子どもとコミュニケーションをしながら学ぶ良い体験ができました。
・特に改善は必要ないかと思いますが、「なぜ?」の理由がさらに詳しく伝わるか各々が一人か二人に質問を投げかけているのではと思いました。
・とても充実していた講座でした。
・子ども達が全て自分で実験を進められるように準備がなるべく手出しせずギリギリまで見守ることが大事と思う(手取り足取りは×)と思う)、午後の実験はさらに詳しくできた点がとても良かった。今回の実験がとても身近な題材で子ども達も熱心で良かった。
・ここぞと、時間が足りなくなってしまうかもしれないことがある。よゆうを持たず、間延びすることもあってもいいのではと思います。
・担当した席の子どもたちはみんな実験をやれていたのもとても良かったです。
・午前の実験では時間があまり余裕がなかったと感じた。もっと時間に余裕があるスケジュールにすれば子ども達ももっといろいろができるのではと思います。

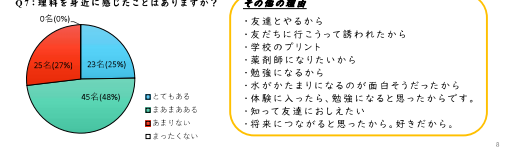


参加児童のアンケート結果-実験前

Q5: 理科は好きですか? (回答者: 93名/94名 回収率: 99%)



Q6: 「身近な夏の不思議体験」に参加しようと思った理由を教えてください。(複数回答可)

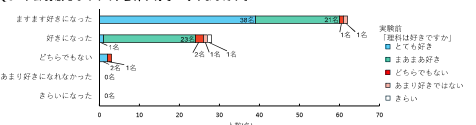


その他の理由

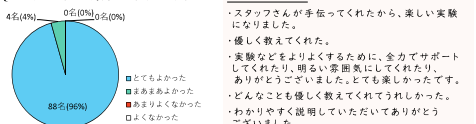
・友達とやるから
・友だちに行こうって誘われたから
・学校のプリント
・夏休みにしたいから
・実験に入ったらおもしろいから
・水がたままりになるのが面白そうだから
・体験に入ったら、勉強になると聞いたので。
・知って友達に誘われたから。
・将来につながると思ったから。好きだから。

参加児童のアンケート結果-実験後

Q8: 今日実験をしてみて、理科が好きになりましたか?

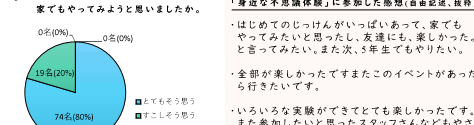


Q9: スタッフさんの対応はどうでしたか?



参加児童のアンケート結果-実験後

Q10: 今日実験したことを覚えておりましたか?



「身近な不思議体験」に参加した感想(自由記述、抜粋)

・はじめてのじけんがうーぱいあって、家でもやってみようと思ったし、友達にも、楽しかった。と言ってみた。また次、3年生でもやりたい。
・全部が楽しかったです。またこのイベントがあったら参加したいです。
・いろいろ実験ができてとても楽しかったです。また参加したいと思ったスタッフさんなどもやさしく楽しかったしうれしかったです。



考察

サポートスタッフへのアンケート結果から、事前ワークショップの開催は当日の不安を軽減し、児童への声掛けや安全管理を含む支援力の向上に寄与することが明確であった。また、ワークショップで得られた感想・助言を踏まえ、進行や実施方法(説明の仕方、遠慮地のタイムアウト)を事前に微調整し、当日の運営準備につなげることができた。さらに、実験子は児童の興味・関心を引き出すとともに、児童とスタッフの関係を深める点でも有効であった。

一方で、適切な時間配分と児童の集中力を維持する進行の工夫が今後の課題である。児童へのアンケート結果より、1名アンケート未回答者はいたものの、多くの児童から本講座に対する肯定的な意見が得られた。

実験前に理科が「嫌い」「あまり好きでない」と回答した児童も、実験後には「ますます好きになった」「好きになった」と変化が見られた。また、「今日の実験を家でやってみようと思った」という質問に対して、全員が「とても思う」「少し思う」と回答した。スタッフについても、「手伝ってくれたから、楽しい実験になりました」等、支援に対する肯定的な記述が多かった。

以上より、本講座は理科への興味を引きだし、関心の継続へのきっかけになったことが示唆された。さらに、サポートスタッフによる補助は、児童の理解を支える上で有効であったと考えられる。



総括

本取り組みは、地域の小学生を対象に、身近な科学現象を実験で体験させることで理科への興味・関心を喚起し、学びの継続につながることを目指した地域連携型の科学教育活動である。市民組織との協働を通じて地域とのつながりを深めながら運営した。

その成果として、サポートスタッフが行う導入デモを本実験への動機づけとして位置づけ、予想・体験を組み込んだ流れで実施したことで、児童は身近な現象への興味を高め、実験で確かめたいという意欲をもって本実験に臨む様子が見られた。

児童アンケートでは肯定的な反応が多く、理科への好意的変化や「家でやってみよう」という意欲が示された。本講座が関心の継続に向けたきっかけとなる可能性が示唆された。また、市民組織の協働により、実験補助・安全管理・デモ等の役割分担が整い、事前の打ち合わせ・ワークショップを通じて手順や声かけ、安全上の注意点、導入・デモのねらいと見せ方を具体的に理解・共有することで、児童との関係形成を含む支援力向上につなげた。課題としては、時間が不足して「かけあし」になる場面と、余裕を持たせると間延びする可能性の両面が示されており、活動に緩急をつけた観察や問いかけの時間を確保する時間設計が必要である。あわせて、「なぜ?」を引き出す質問や声かけを計画的に組み込み、体験が「楽しかった」で終わらず、分らないことに気づき、調べたり考えたりすること自体を楽しんだり感じられる経験につながる工夫が求められる。

謝辞

本講座は、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の助成を受けて実施されました。また、開催いただきました山科区「はくくみ」ネットワーク実行委員会の皆様にも深く感謝申し上げます。



2. 京都外国語大学・京都外国語短期大学

テーマ	大学から地域社会へ:コミュニティ通訳認知度の壁を越え、大学の社会的役割～情報共有と実践課題～	
発表代表者	佐藤 晶子:京都外国語大学 外国語学部 英米語学科 教授	
連名発表者	河野 弘美:京都外国語短期大学 キャリア英語科 教授 戸田 行彦:京都外国語大学 外国語学部 英米語学科 講師 アイシュワリヤ・スガンディ:京都外国語大学 外国語学部 英米語学科 准教授	
キーワード	コミュニティ通訳	大学—小中高等学校との協働
	地域連携モデル	人材育成
発表の概要	<p>第 29、30 回 FD フォーラムの発表を通じ、本学のコミュニティ通訳教育は着実に発展してきた。第 30 回では、認知度向上活動と 6 領域の現状把握を報告し、2025 年度はその成果を基盤に、更なるコミュニティ通訳への正しい知識共有、地域連携への方策、また実践がうみ出す教育的効果の可能性、大学の社会的役割を検討する試みを行った。</p> <p>本発表では、それらの試みのうち以下の 3 つの調査結果に焦点をあて分析を報告する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 履修学生へのアンケート:学習効果とキャリア意識の変容 2. 学内教職員へのアンケート:コミュニティ通訳教育の認知度と評価 3. 公立中学校・高等学校教員へのアンケート:地域の多文化共生教育のニーズと連携可能性 <p>大学のコミュニティ通訳育成プログラムと初等中等教育機関との連携により、大学の役割の可能性が見えてくる。本発表では、大学の地域社会における役割と、持続可能な教育連携モデルの構築と課題について報告する。</p>	

大学から地域社会へ：コミュニティ通訳認知度の壁を越え、大学の社会的役割 ～情報共有と実践課題～

佐藤晶子* 河野弘美** アイシュワリヤ スガンディ* 戸田行彦*

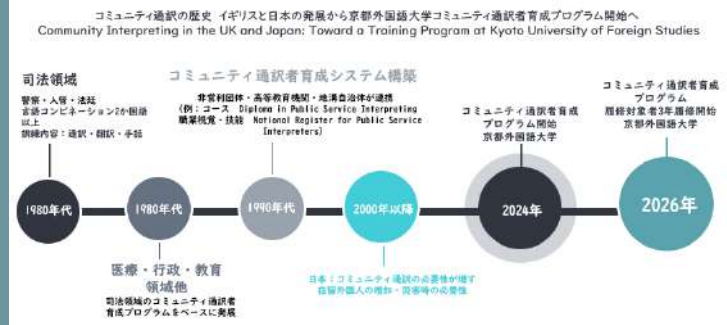
2026.02.28. *京都外国語大学外国語学部 **京都外国語短期大学キャリア英語科

【倫理的配慮】本研究に関しては、京都外国語大学倫理調査委員会における倫理審査を受け、承認されています（管理番号2025-2-07）

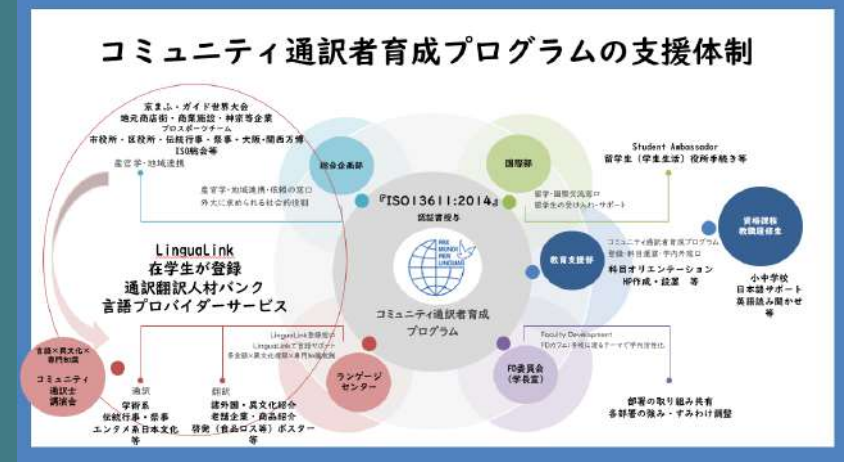
コミュニティ通訳とは

Code of Professional Conduct 1.6 A “Public Service Interpreter” means an interpreter who works in the context of public services, such as the legal profession, health services and local government related services, which include housing, education, welfare, environmental health and social services. (National Register of Public Service Interpreters (U.K), 2026, 0205.)

行動規範 1.6 「公共サービス通訳者」とは、法律専門職、医療サービス、および地方自治体関連サービス（住宅、教育、福祉、環境衛生、社会福祉サービスを含む）などの公共サービスの文脈で業務を行う通訳者をいう。（英国公共サービス通訳者全国登録機関、2026年2月5日閲覧）



コミュニティ通訳者育成プログラム履修生の実践サポート体制強化 学内FDで情報共有：京都外国語大学だからできる社会的に必要な人材育成



コミュニティ通訳 クイックガイド

外国人住民の「困った」を支援するサポート体制

暮らしの手続きを支える 役所（行政サービス）	学校と家庭の橋渡し 教育（学校）
役所の窓口で、外国人住民が手続きや相談を安心して受けられるように、「こぼれ」をなくすコミュニティ通訳士。	外国にルーツのある子どもたちが安心して学校生活を受けられるように、先輩と家庭の間で「こぼれ」になるコミュニティ通訳士。
① 申請・手続きの案内・書類の準備など ② 申請書の作成、申請書の提出、申請書の取り戻し（戻しによる、申請と外国人住民と一緒で書類の提出）	① 二言語（英・日、英語・日本語） ② 地域の慣習や文化を伝える
診療から事務までサポート 医療（病院）	警察からの説明・質問の橋渡し 司法（警察・入管・裁判所）
症状の説明、検査・治療、薬の案内に代わって、受付・問診票・検体・会計・予約などの事務手続きも、ことばの不安なく進められるよう、医療施設と患者を支援するコミュニティ通訳士。	警察での説明・質問の橋渡し、入管での手続きや面接の通訳、法律相談やトラブル時のサポート、法廷通訳も含まれるコミュニティ通訳士。

コミュニティ通訳者育成プログラムに関する組織内認知度アンケート（44名）2025年1月実施

考察

2024年度は「学内認知度向上」を主要課題とし、100時間以上の研修打ち合わせ、対面6回の説明会、ホームページ開設等の多面的な活動を展開した。2025年度は、これらの基盤の上に履修学生へのアンケートを加え、研究の焦点を「認知度向上」から「教育効果の実証」へと発展させた。第29回から第31回のFDフォーラム発表は、「プログラム構築期」→「認知度向上・現状把握期」→「効果検証・地域連携期」という段階的發展を示しており、大学における新たな教育プログラムの立ち上げから定着までのモデルケースといえる。さらに、教育効果を持続的なものとするためには、コミュニティ通訳6領域（行政・医療・司法・教育・災害時ボランティア・異文化交流）に直結した実践場所の確保が不可欠であり、地域との関係機関との連携体制の構築が今後の重要課題である。

結論

2024年度と2025年度の調査比較から、学内認知度向上活動は一定の成果を上げたものの、ISO 13611等の専門的知識の浸透には継続的な取り組みが必要であることが明らかとなった。また、学外の教育機関におけるコミュニティ通訳の潜在的な需要の高さが確認され、大学と地域の教育連携による人材育成の循環システム構築の可能性が示唆された。今後は、コミュニティ通訳6領域に直結した実践場所の確保と地域関係機関との連携体制の整備を進め、外国語大学の専門性を活かした持続可能な教育モデルの実現を目指したい。

京都府在住外国人住民の現状と課題

参考：京都府 | 第1回 | 在留外国人数の推移

参考：京都府 | 京都府外国人住民数の推移

現場のあるある困りごと

- ベトナム語・ネパール語等の通訳者が圧倒的に不足
- 技能実習生は日常会話でも医療用語の理解が困難
- 三者懇談で生徒本人が通訳意図的に誤訳するケース
- 進路指導・奨学金説明等の複雑な内容伝達が困難
- 医療通訳派遣は英・中・韓のみ、新興言語に未対応
- 文化的背景の違いによる相互理解の困難さ
- 予算確保・手続きの煩雑さが導入の最大障壁

出典：教職員アンケート-Consortium調査より

「学校教育」現場のコミュニティ通訳に関する認知度調査 教員（小・中・高）向けアンケート(37名) 2025年1月実施 グーグルフォーム

コミュニティ通訳を知っていますか？	コミュニティ通訳は重要だと思いますか？	コミュニティ通訳の手順を知っていますか？

3. 京都精華大学

テーマ	司書課程「図書館サービス特論」授業内での地域連携 ～一乗寺地域イベント運営と岩倉図書館サイン作成～	
発表代表者	木川田 朱美:京都精華大学 国際文化学部 特別任用准教授	
連名発表者	佐々木 美緒:京都精華大学 国際文化学部 准教授	
キーワード	司書課程	地域連携
	図書館	PBL
発表の概要	<p>本発表では、京都精華大学司書課程での地域連携を伴うPBL授業の実践について述べる。授業「図書館サービス特論」では2023年度より下記2件の地域連携を授業内で行っている:</p> <p>①岩倉図書館サイン作成:京都市岩倉図書館との連携で、児童コーナーの棚差しサインを学生が制作した。ユニバーサルデザインや多様性について学びつつ、公共広報物に適切な表現を検討した。</p> <p>②「本でつなぐ一乗寺」:一乗寺地域の私設図書館「みんなの図書館 momokuri」と書店「恵文社一乗寺店」「一乗寺ブックアパートメント」との共同企画である。学生は地域や利用者を調査したうえで連携書店で選書ツアーを行い、本の広報媒体(POP、帯)を作成して展示した。</p> <p>これらの実践は学生に地域社会と協働する実践的学びを提供し、地域図書館の改善にも寄与した。一方で、資格課程の選択科目としての限界や成果物管理などの課題も明らかになった。今後も地域に根ざした司書養成を目指し、連携体制の強化と教育改善を図る。</p>	

司書課程「図書館サービス特論」授業内での地域連携

——乗寺地域イベント運営と岩倉図書館サイン作成——

木川田朱美・佐々木美緒（京都精華大学）

【1. 背景・目的】

図書館法および「これからの図書館像」は、実践的かつ専門的な知識・能力と地域社会の課題やニーズを把握する能力の育成を司書養成に求めている。しかし、地域社会の課題やニーズを把握する能力の育成に関する具体的方法は各養成機関に委ねられている。本学司書課程では、地域と直接関わる PBL 型授業を通して「地域に根ざした司書養成」を実現することを目的とした。

【2. プロジェクト概要】

本発表では、「図書館サービス特論」において 2023 年度から 2025 年度までの間に実施した 2 つの地域連携事業を下記に報告する。



写真 1: 「本でつなぐ一乗寺」の様子

【3. 事例①】

本でつなぐ一乗寺

■ 連携先

- ・ みる図書館 momokuri（私設図書館）
- ・ 恵文社一乗寺店（地域書店）
- ・ BOOK APARTMENT（地域書店）

■ 授業設計

地域調査（一乗寺地区の特性把握）
みる図書館 momokuri 訪問・利用者観察
恵文社一乗寺・BOOK APARTMENT での選書ツアー
カバーリングと POP・帯制作
展示（約 2 か月間）

■ 教育的意義

- ・ 利用者像を想定した選書
- ・ 資料と利用者をつなぐ POP 制作
- ・ 地域との実際の接点（SNS 上の交流発生）

■ 成果

- ・ 利用者からの感想メモ
- ・ Instagram 投稿と学生の返信
- ・ 地域との自然発生的コミュニケーション

→ 学生は「足を運ぶこと」の重要性を実感

【4. 事例②】 岩倉図書館

児童コーナーサイン作成

■ 連携先

京都市岩倉図書館
（児童利用割合 約 22%、児童書 36%）

■ 課題

児童コーナー棚差しサインのリニューアル

■ 制作プロセス

- ・ 館内写真による環境把握
- ・ ユニバーサルデザイン・情報保障の学習
- ・ 公共広報ガイドラインの参照
- ・ 班別協働（Slack 活用）

■ 学習効果

- ・ 可読性の重要性
- ・ 多様な利用者への配慮
- ・ 利用者として無意識に支えられていた図書館サービスの再認識

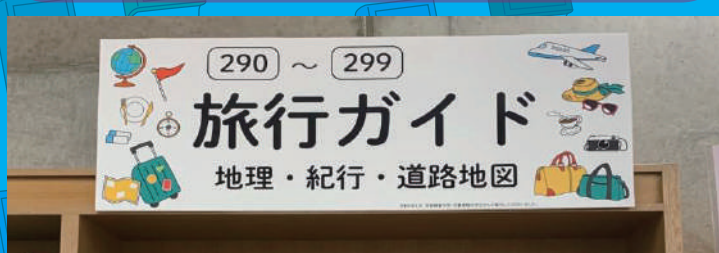


写真 2: サイン作成の成果物

【5. 教育的効果】

2 つの連携から得られた効果：

- 利用者像を想定する実践的思考
- 公共性・多様性に関する学び
- 協働作業における実務能力 → 「地域社会の課題やニーズを把握する能力」の涵養

【6. 今後の展望】

・ 連携の制度的安定化、地域調査の充実、評価方法の確立、継続可能な地域貢献モデルの構築
地域連携は司書養成における実践的能力形成に有効である。本連携は、授業の制約下でも地域と協働する枠組みを構築しうることを示した。



写真 3～5: サイン作成前後の違い

4. 龍谷大学

テーマ	学生参画に携わる学生スタッフの活動に対する意識調査 ～他者との協働に必要な力の育成を目的として～	
発表代表者	小林 珠子: 龍谷大学 学修支援・教育開発センター 専門員	
連名発表者		
キーワード	学生スタッフ	学生参画
	活動に対する意識	コミュニケーション能力
発表の概要	<p>龍谷大学では、半数近くの部署において学生スタッフがさまざまな活動に従事している。本研究は、学生スタッフがその活動に何を期待し応募したのか、活動を通してどのような成長を実感し、困難を覚えているのかなどについてアンケート調査を実施し、学生スタッフがその活動を通し、より多くの学びや成長を得ることのできる研修プログラムを開発することを目的としたものである。</p> <p>本発表では、学生スタッフを対象に実施したアンケート調査の結果について報告する。調査の結果、学生スタッフの多くはコミュニケーション能力に関心を寄せていることが明らかとなった。この結果を踏まえ、学生スタッフが教職員や他学部・他学年の学生と協働する際に必要な力を育成するための育成プログラム(研修)についても報告する。</p>	

学生参画に携わる学生スタッフの活動に対する意識調査 —他者との協働に必要な力の育成を目的として—



発表代表者 小林珠子 学修支援・教育開発センター 専門員

研究概要

龍谷大学では、半数近くの部署において学生スタッフがさまざまな活動に従事している。本研究は、学生スタッフがその活動に何を期待し応募したのか、活動を通してどのような成長を実感し、困難を覚えているのかなどについてアンケート調査を実施し、学生スタッフがその活動を通し、より多くの学びや成長を得ることのできる研修プログラムを開発することを目的としたものである。

本発表では、学生スタッフを対象に実施したアンケート調査の結果を報告する。調査の結果、学生スタッフの多くはコミュニケーション能力に関心を寄せていることが明らかとなった。この結果に基づき内容を検討し実施したスキルアッププログラムについても報告する。

研究内容

◆2種類のアンケート調査を実施

①各部署で管理・把握・雇用している学生スタッフに関わる調査

調査期間：2025年4月9日～4月25日

調査対象：全部署

調査方法：Google Forms

回答数：全部署（45部署）

調査項目：学生スタッフの募集時期を教えてください

学生スタッフの選考方法を教えてください

学生スタッフの人数を学年ごとに教えてください

学生スタッフに賃金を支給していますか

学生スタッフに対して研修は実施していますか など

②学生スタッフ対象 活動に関わる意識調査

調査期間：2025年5月23日～6月30日

調査対象：学生スタッフ全員

調査方法：Google Forms

回答数：291名

調査項目：学生スタッフの勤務歴を教えてください

学生スタッフに応募した理由を教えてください

学生スタッフの経験を通してできるようになった・伸ばす

ことができたことを教えてください

学生スタッフの経験のなかで難しいこと・困っていること

を教えてください

学生スタッフの経験を通して身につけたい力・伸ばしたい

ことを教えてください など

◆学生スタッフのうち希望する学生に協働に関わるスキルアッププログラムを実施

目的：学生スタッフの活動を通して、より多くの学びや成長に

繋げるための育成プログラムを模索すること

対象：参加を希望した学生スタッフ

実施日：深草学舎

2025年11月25日、12月2日、12月9日

瀬田学舎

2025年11月28日、12月5日、12月12日（各回90分対面実施）

参加者：深草学舎 9名

瀬田学舎 6名

（3回全てに参加した学生数）

特徴：所属・従事する学生スタッフ活動の種類を超えて交流できる

◆スキルアッププログラム実施内容

第1回 タイトル：人は人、私は私 —自他の価値観を理解する—

内容：アイスブレイク（自己紹介）

ケースメソッドを用いたプレスト

第1回プログラムの振り返り（ワークシート作成）

第2回 タイトル：コミュニケーション能力って何？

内容：アイスブレイク（私のコミュニケーション遍歴）

コミュニケーション能力についてプレスト

第2回プログラムの振り返り（ワークシート作成）

第3回 タイトル：質問上手は引き出し上手&伝え上手

内容：アイスブレイク（好きな食べ物は何？）

質問力&雑談力に関わるペアワーク

第3回プログラムの振り返り（ワークシート作成）

研究成果

◆2種類のアンケート調査を実施

①各部署で管理・把握・雇用している学生スタッフに関わる調査結果

学生スタッフが活動する部署 26/45部署

レベル別龍谷大学の学生参画

マクロレベル	学部連合学生会による全学協議会
メゾレベル	学部連合学生会主催FD 龍大しゃべり場 観察学生による授業観察 授業アンケート・学生調査・各種調査
ミクロレベル	学生スタッフによる履修登録相談会 ピアサポ・クラサポ・TA 高大連携サポーター・アドミッション サポーターによる活動 ピアサポによるノート・PCテイク ライティングチューターによる ライティング支援 など

★マクロレベルからミクロレベルまですべてのレベルにおいて学生参画がなされている

②学生スタッフ対象 活動に関わる意識調査結果

学生スタッフへの応募理由	第1位：興味・憧れ・コミュニティ	第2位：自己成長	第3位：他者貢献
できるようになる・伸びた力	第1位：コミュニケーション能力	第2位：PC・ITスキル 専門スキル	第3位：自己啓発
難しい・困っていること	第1位：コミュニケーション能力	第2位：知識・技術・経験	第3位：環境（人員・設備・マニュアル）
身につけたい・伸ばしたい力	第1位：コミュニケーション能力	第2位：自己成長・知識スキル	第3位：PC・ITスキル・専門スキル

◆スキルアッププログラム実施結果

参加者満足度 第1回：86点 第2回：91点 第3回：92点（100点満点中）

参加者からの声

- ・色んな意見を聞くことができ良かったです。共感だけでなく新たな気づきを得ることもできました。
- ・グループを組む時、運営する時のコツなども聞いて非常にためになった
- ・コミュカが大事と言われ続けてきた中で、じゃあ一体コミュカとは何か？コミュニケーションとは？と立ち止まって考えられたことが面白かった。それにより（簡単なこと、難しいことを選ぶ中で）人によってむずかしさが違うそうだと感じる事ができた！他人の意見（グループワーク中の）も、ワークシートを回したときに他者の自己分析が見れたのもとても楽しく面白かった！
- ・コミュニケーション能力と何か、それに必要なものは何かを考える時、ふせんを使って皆の意見を簡単にまとめられ、話し合いをスムーズに進められたことが良かった
- ・テーマはあったが、雑談ができて楽しかったから。普段の会話では意図的に話しやすいトピックを選びがちだったため、自分の雑談力の足りないところが見つけられたから。質問内容より質問の仕方にもフォーカスして、心理学部のカウンセリングの学びにもつながりそうだったから。
- ・グループワーク、ペアワーク、個人ワークでインプットとアウトプットを繰り返して次何を話すかを徐々に洗練することができた。3回じゃ足りないので教養の授業とかになれば面白いと思います。

今後の課題

課題はおもに次の2点である。

1 学生と教職員双方の学生参画に対する意欲・関心が薄い

龍谷大学では、ミクロレベルからマクロレベルまで全てのレベルにおいて学生参画がなされている。学部連合学生会の活動や観察学生による授業観察は、論文や講演などで紹介されるなど、外部からの注目度も高い。しかし、学内の認知度は高いと言えない。実際に2025年度に実施された学部連合学生会主催FDは深草学舎・瀬田学舎それぞれで3日間実施されたが、3日間合わせて参加者は30名程度にとどまる。また2025年度に実施した授業観察は10件であった。

2 学生スタッフの活動が活動に従事する学生以外に浸透していない

スキルアッププログラムには、さまざまな活動に従事する学生スタッフが集まったが、お互いの活動内容を知らない学生が大半を占めていた。この結果を踏まえると、学生スタッフ活動に従事していない学生の多くは、学内にさまざまな学生スタッフ活動が存在していることを知らない可能性が高い。したがって、学生スタッフ同士はもちろん、一般学生と学生スタッフが交流を通し活動内容を知る場を設けることが必要であると言える。

5. 同志社女子大学

テーマ	学部横断型アプローチによる新たな知の創出：学内助成研究(三期・2017-2025)を通じた教育デザインに関する総合的考察	
発表代表者	成橋 和正：同志社女子大学 薬学部 医療薬学科 教授	
連名発表者	今井 由美子：同志社女子大学 表象文化学部 英語英文学科 教授 ROGERS, Lisa：同志社女子大学 現代社会学部 社会システム学科 教授 佐伯 林規江：同志社女子大学 学芸学部 国際教養学科 教授 橋本 秀実：同志社女子大学 看護部看護学科 准教授 倉橋 優子：同志社女子大学 生活科学部 食物栄養科学科 准教授 若本 夏美：同志社女子大学 表象文化学部 特別任用教授 高橋 玲：同志社女子大学 名誉教授 飯田 毅：同志社女子大学 学芸学部 国際教養学科 特別任用教授	
キーワード	学部横断型アプローチ	教育デザイン
	学部間教員連携	研究プロジェクト
発表の概要	同志社女子大学は他学部教員間の交流が活発で学部横断型研究を推進する助成制度もある。「本学の教育理念及び Vision 150 を活かした共通英語教育開発のための基礎研究」(2017～2019 年度)では、教育理念に相応しい共通英語教材の開発を目指し、英語力・学習方略・学習動機の調査と分析を行った。「Vision 150 を活かす遠隔授業と対面授業についての総合的研究：高度で質の高い授業の探求」(2021～2023 年度)では、6 学部の学生を対象に遠隔授業と対面授業に関する量的・質的調査を行い、分析結果に基づき各学科の理想的な授業形態を検討した。「女子大学におけるウェルネスとエンパワメントに関する研究」(2025 年度)では、学生のストレスと要因を質的・量的に把握し、ウェルネスの実態解明と支援の方向性を検討している。本発表では、これら学部横断型アプローチによる教育デザイン研究を総括し今後の展望を考察する。	

6. 京都芸術大学

テーマ	学生参画型 FD 研修を通じた教育改善の実践報告	
発表代表者	竹内 里実: 京都芸術大学 学習支援・教育開発課 課長	
連名発表者	今井 尚美: 京都芸術大学 学習支援・教育開発課 吉川 春佳: 京都芸術大学 学習支援・教育開発課 荻野 愛里沙: 京都芸術大学 学習支援・教育開発課	
キーワード	カリキュラム改善	授業改善
	学生参画	
発表の概要	<p>京都芸術大学では、2021 年度に FD 研修の体系化を行い、「教育」「学生支援」「大学運営」の 3 領域と、「フェーズⅠ(導入)」「フェーズⅡ(実践)」「フェーズⅢ(支援)」の 3 段階に整理した FD・SD 研修を実施している。</p> <p>本発表では、2022 年度から新たに取り組んだ学生参画型 FD 研修について実践報告を行い、学生参画で行うことによりどのような成果が得られたか、また、授業レベルの改善や、カリキュラムレベルの改善にどのように活かされたかを共有する。また、ポスター発表の様子など、芸術大学の学生ならではの研修成果についても紹介したい。</p>	

学生参画型 FD 研修を通じた教育改善の実践報告

京都芸術大学 学習支援・教育開発課
竹内里実、今井尚美、吉川春佳、荻野愛里沙

1 京都芸術大学の FD 活動について

京都芸術大学では、大学の課題に対する共通認識を持ち、改善に向けた自律的な努力を促すことを目的として、2010 年度より教職員合同の FD 研修を実施している。2021 年度には FD 研修プログラムの体系化を行い、FD・SD 研修を「教育」「学生支援」「大学運営・マネジメント」の3 領域、および習熟度別の 3 フェーズに整理して提示した（図 1）。これにより、教職員が自らの能力開発や資質向上のために研修を選択することが可能となり、新任教員研修パッケージの導入、ルーブリック研修、オンデマンド型「FDTV」の開発などを行ってきた（図 2）。今回報告する「学生参画型 FD 研修」は、2021 年度の試行以降、これまで 6 回開催し、教職員延べ 185 名、学生延べ 255 名が参加している。本学の FD 活動の中でも、教・職・学が協働する特色ある取り組みとして定着しつつある。本稿では、その導入背景、具体的実践、および成果と課題について報告する。



2 2つの学生参画型 FD 研修—実践報告

① 背景

学生参画型 FD は、学園中期計画（Vision2021）に掲げる教育力強化や内部質保証の推進を目的に、学生の声を教育改善へ活用するために計画した。2019 年度には、姉妹校である東北芸術工科大学の事例を参考に「ぶっちゃけトーク」と題した研修を実施したが、当時は施設・設備への要望が中心となり、教育内容の直接的な改善に繋げにくいという課題が残った。そこで、コロナ禍を経た 2021 年度の試行では、目的を「教育内容・方法の改善」に特化し、カリキュラムレベルの「ドリームツリーをつくろう」を実施することとした。

② トライアル実施（2021 年度）

2021 年 12 月に「ドリームツリーをつくろう」を実施した。これは、学科カリキュラムへの理解を深めた上で、教員と学生が理想の「ドリームツリー（カリキュラム・ツリー）」を協働で描く 1 日プログラムである。FD 委員 9 名と、その呼びかけに応じた学生 27 名が参加した。企画にあたっては学生の主体性を重視し、本学学生の特性である「手を動かしながら形にする」プロセスを導入した（図 3）。研修は活気に溢れ、参加学生の満足度も高かった一方、「他学科の教員や学生ともさらに交流したい」といった要望も寄せられた。



③ 本格実施（2022 年度～現在）

トライアルの成果を受け、2022 年度より 2 つの研修を本格始動させた。授業レベルの「授業カイゼン」研修は、元来「授業改善アンケート」に基づく組織的活動として一部教員に参加が義務づけられていた。学生参画にあたり教員アンケートを実施したところ、「教員間で議論すべきテーマである」「学生の前では自由な発言が阻害される」といった懸念も示された（賛成 19 / 反対 10）。こうした懸念に対し、研修名を「授業カイゼン」としてポジティブな印象へ刷新し、教員の参加を義務だけでなく公募制とする、学生へ研修趣旨を丁寧に説明する、議論のテーマを具体的に絞り込むといった対策を講じた。学生は「学生 FD 委員」として任命し、教員との対話を通じた改善策の探究を求めた。その結果、事前の期待度は教員の 85% であったが、事後の満足度は 97%（教員）、90%（学生）と極めて高い数値を示した。また、成果の可視化として「ドリームツリー」の展示（図 4）や在学生専用サイトでの報告（図 5）も行っている。現在、2024 年度のカリキュラム改訂を経て、「授業カイゼン」は以下のような改善を主に継続している。

- 2023 年度：学生 FD 委員の公募開始（多様性と主体性の向上）／教員の参加義務化を解消（積極的参加の促進）
- 2024 年度：放課後 2 回開催から 1 日プログラムへ変更（対話時間の十分な確保）

※図 4



※図 5 在学生専用サイト「学生参画型 FD 活動について」

表 1 学生参画型研修実施一覧

A カリキュラムマネジメントⅡ（ドリームツリーをつくろう）
B 授業カイゼン

■ とても満足している ■ やや満足している ■ どちらでもない ■ やや不満である ■ とても不満である

研修種類	実施日	教員	教員満足度	学生	学生満足度	職員	専工大教員	合計	備考
A	2021年12月11日	9	-	27	-	3	-	39	トライアル
A	2022年5月21日	22	-	47	-	-	-	69	
B	2022年10月6日	37	3% 21% 76%	42	8% 4% 88%	-	-	79	
B	2023年3月23日	27	30% 61%	24	24% 76%	-	-	51	
B	2023年10月5日	36	13% 65% 22%	57	8% 4% 88%	-	-	93	学生うち5名公募
B	2024年3月21日	26	29% 71%	40	6% 8% 86%	-	-	66	学生うち7名公募
B	2024年9月19日	30	25% 75%	48	26% 74%	13	5	96	学生うち3名公募
B	2025年9月19日	29	43% 57%	44	17% 3% 80%	19	5	97	学生うち7名公募

3 得られた成果

学生参画型研修の継続は、教育現場に確かな変化をもたらしている。2025 年度には、自ら立候補した 7 名を含む 44 名の学生が全学科から参加し、教職員を合わせると約 100 名規模の研修へと発展した。教員からは「授業では見えにくい学生の視点を知る貴重な機会となった」、学生からは「自分の意見が大学を動かしていると実感できた」といった声が寄せられている。また、議論の内容をポスターとして「作品化」する手法も、芸術大学らしい主体的な参加を促す要因となっている。アンケートでは全 6 回を通じて教職学ともに 9 割以上が「有意義」と回答した。具体的な改善事例は以下の通りである。

- フィードバックの強化：「講評時間が短く、十分なフィードバックが得られない」との声に対し、授業後のコメントシート配布による補完を実施した。
- 課題量の調整：毎回の課題を、中間・最終レポートへ集約し、学習の質の向上と他科目への注力を両立した。
- 対話の場の創出：芸術教養科目の教員による、オンラインオフィスアワーを試行した。
- 受講環境の整備：抽選科目の定員増や、クラス増設を 2026 年度より実施。

4 今後の課題と展望

学生参画型研修は定着しつつあるが、未参加者への周知には依然として課題が残る。今後は、改善実績をさらに蓄積・共有し、教員には「改善のヒントを得る場」、学生には「学びの環境を変える機会」としての意義を浸透させたい。また、2027 年度には新カリキュラムの完成年度に合わせ「カリキュラム・マネジメントⅡ（ドリームツリーをつくろう）」を再開予定である。本学の内部質保証システムは、学生の視点を中核に据え、教育の質向上に取り組む体制を敷いている。今後も学生参画の取り組みを維持・発展させ、学生の学びの質のさらなる向上を目指していく。

7. 京都産業大学

テーマ	学生スタッフ「LINK」主導による異文化交流イベントの実践報告 ～グローバルコンピテンシーを育み、留学生と学生を結ぶ場づくり～	
発表代表者	杉江 昌子: 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(グローバルコモンズ 学習支援担当) 職員	
連名発表者	入江 莉帆: 京都産業大学 外国語学部 英語学科 イングリッシュキャリア専攻 4年 野村 史: 京都産業大学 外国語学部 英語学科 イングリッシュキャリア専攻 4年 吉田 壘: 京都産業大学 外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ドイツ語専攻 4年 レイシー アンドレア: 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 グローバル コモンズ 学習支援担当 ハフマン 美亜: 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモ ンズ 学習支援担当	
キーワード	学生スタッフ	異文化交流イベント
	準正課・課外	主体的な学び
発表の概要	<p>京都産業大学グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」は、2021年の活動開始から5年目を迎えた現在も、準正課の主体的な学習活動として語学や異文化交流のイベントを学生主導で継続して実施している。「学内にグローバルマインドを広げること」をミッションに、参加者が外国語や異文化を楽しく学びあう場を提供してきた。毎年入れ替わるメンバーの人数や専門、参加者のニーズに応じて活動内容を進化させている。学生が主体的に関わる中で得られる成長実感には、語学力、異文化理解力、課題解決力、貢献意識などのグローバルコンピテンシーの成長がみられる。本発表では、留学生との親睦を図る異文化交流イベントを取り上げ、企画から実施までのプロセスやメンバー間の協働の様子を学生の声で紹介する。さらに、活動を通して学生がどのような行動や思いの変化を遂げたのか、実践から得た気づきと成長を学生の視点から伝える。</p>	

学生スタッフ「LINK」主導による異文化交流イベントの実践報告 ～グローバルコンピテンシーを育み、留学生と学生を結ぶ場づくり～

【発表者】 杉江 昌子 (教育支援研究開発センター事務局 グローバルコモンズ学習支援担当) / アンドレア・レイシー (教育支援研究開発センター事務局 グローバルコモンズ学習支援担当) / ハフマン 美亜 (教育支援研究開発センター事務局 グローバルコモンズ学習支援担当) / 入江 莉帆 (外国語学部 英語学科 イングリッシュキャリア専攻 4年) / 野村 帆 (外国語学部 英語学科 イングリッシュキャリア専攻 4年) / 吉田 豊 (外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ドイツ語専攻 4年)

背景と目的
京都産業大学グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」は、2021年の活動開始以来、「学内にグローバルマインドを広げること」をミッションに、語学・異文化交流イベントを学生主導で実施している。メンバーの入れ替わりや参加者の変化に応じて、活動の振り返りを通じて進化・発展させながら、準正課における主体的な学習の場を提供してきた。本発表では、留学生との親睦を図る、異文化交流イベントを取り上げ、企画から実施までのプロセスやメンバー間の協働の様子、および運営上の変遷を学生の声で紹介する。さらに、異文化交流イベントの運営にかかわることで、学生がどのような行動や思いの変化を遂げたのか、実践から得た気づきと成長を学生の視点から伝える。

異文化交流イベント HANAMI FEST WELCOME FEST HALLOWEEN FEST 貿易ゲーム



概要と実績 (2025年度)

HANAMI FEST
開催日時: 4月4日・5日(新歓祭)
担当LINK数: 14名
参加者数(延べ): 77名 (うち交換留学生28名)
開催場所: ウッドデッキ (屋外)

WELCOME FEST
開催日時: 9月22日
担当LINK数: 25名
参加者数(延べ): 75名 (うち交換留学生40名)

HALLOWEEN FEST
開催日時: 10月27日
担当LINK数: 18名 (うちPM4名)
参加者数(延べ): 48名 (うち交換留学生11名)

貿易ゲーム
開催日時: ①5月28日 ②12月17日
担当LINK数: 2名
参加者数(延べ): 38名 (うち交換留学生3名)

運営体制

- ファシリテーションや司会など、すでに運営経験のあるメンバーが中心に企画運営
- 7月中に希望アンケートを送付し、運営メンバーを募る。
- 2025年度は、イベントを統括するプロジェクトマネージャー (PM) を導入し、統制が取りやすくなった。
- 2025年度は、イベントを統括するプロジェクトマネージャー (PM) を導入し、統制が取りやすくなった。

変遷

- 2022年にスタート。桜の下 (ウッドデッキ) で、英語と日本語でディスカッションする当初からのスタイルを継続。誰もが話しやすい雰囲気づくりを目指し、毎年改善を行う。
- 2023年、英語以外の多言語のグループを作る
- 2024年、開催中にLINKへの勧誘も行うことで、1年時から活動に参加する学生が増えた。
- 2025年、ゲームや、日本文化体験などのアクティビティを導入
- 2026年度も開催予定

課題

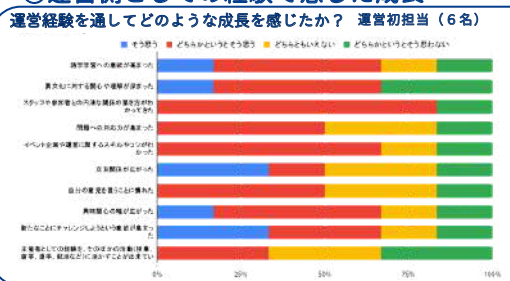
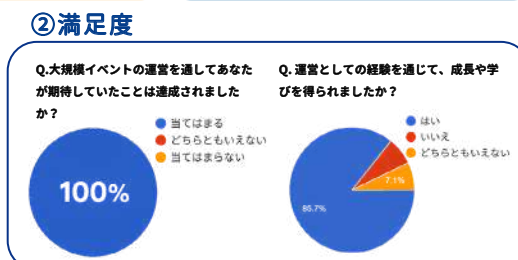
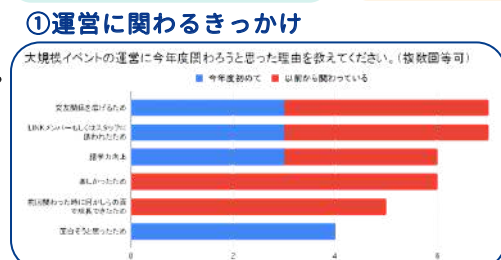
- タイムマネジメント
- 参加者への声掛け、留学生の集め方
- 参加者の言語レベルの差
- ファシリテーターの配置
- 天候や気温、開花の状況
- 夏季休暇中の打ち合わせのための日程調整が難しく、準備開始に時間がかかる
- 統括 (とりまとめ役) が明確でない
- 各アクティビティの担当人数に偏りがある
- 1人1人担当する場合の緊急時対応など
- KSUと留学生が関わる
- お菓子や仮装に関するルールの設定
- 初めて運営にかかわるメンバーのフォロー
- 運営各担当のつながりの希薄さ (情報交換が不足)
- PMの選出の仕方・再現性
- 日・英両方での説明や、扱う国際条約や構成についての理解とリサーチの量
- 専門性がないメンバーのみの場合、イベント内容の方向性を統一しにくいこと

異文化交流イベントアンケート: 調査の概要と結果

調査: 異文化交流イベント運営に関する振り返りアンケート
調査目的: 運営経験を通じた学びや成長について把握し、今後の運営改善につなげる
調査時期: 2025年1月 調査方法: Google Formsを用いたアンケート調査
調査対象者: 2025年度のLINK登録メンバー全員 (69名)
回答者数: 18名

回答者属性 (異文化交流イベント運営への関わり度別)

- 今年度初めて運営に関わった: 6名
- 以前に運営に関わったことがある: 8名
- まだ一度も運営に関わったことがない: 4名



④運営として関わる中での内面的変化

Q1. 初めて運営として関わる中で感じたことがあれば教えてください

Q2. 大規模イベントの運営に複数回関わっていく中で心境の変化はありますか?

Q3. どのような心境の変化が感じられましたか?

【考察】 Q2. 2025年度が「心境 (内面) に変化があった」と回答し、その理由から、イベント運営への関与が、運営担当者への内面にポジティブな変化を与えたことが確認できる。初回は、新しい経験への新鮮さが強く、企画力や協調性など運営に必要な力や、中心メンバーの役割の重要性を学ぶ。一方で、複数回関わると、成功体験を積み重ねることで、自己の成長実感を得ると同時に、自身の課題や運営上の問題に気づく。参加者としての視点で改善に向けた工夫に意識が向くようになる。立場や責任を意識し、リーダーとして運営全体を俯瞰して捉えられるようになるスタッフもいると考えられる。

⑤今後のイベント運営

来年度も大規模イベントの運営に関わりたいと思いますか?

【考察】 来年度の継続希望が78.6%と高いことから、本活動が強い達成感や成長実感で運営に有意な場であったと考える。理由として、企画の楽しさや達成感に加え、リーダーへの挑戦や客観視の向上など、自己成長への意欲が見られた。また、交友関係の広がりや経験の活用といった実質的価値も重視されている。また、卒業する学生が来年度も経験を次に活かしたいという意欲やイベントの発展を願う声があり、本イベントは成長機会や人とのつながりを生む場として認識されていると考えられる。

活動の振り返り

1. 学び・気づき
視野の拡大: 多様な社会的・文化的背景を持つ学生との交流を通じて異文化理解を深め、自身の視野を広げることが可能となった。また、経験を積むごとに他の場でも経験を活かしている。

2. 今後の課題
イベントの引継ぎ: 現行のイベントの運営ノウハウと経験を引き継いで、継続的に実施すること。新メンバーの勧誘と育成。
新イベントの開拓: 参加者のニーズや変化を知り、それに応じて新たなイベントを継続的に提供していくこと。

8. 京都華頂大学・華頂短期大学

テーマ	学びのユニバーサルデザインをめざして ～ストレス評価に基づく環境改善の取り組み～	
発表代表者	根岸 裕子: 京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター(食物栄養学科) 教授	
連名発表者	上田 有里奈: 京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター(生活情報学科) 准教授 柴田 精一: 京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター(幼児教育学科)講師 高岡 理恵: 京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター(幼児教育学科・介護専攻科)教授	
キーワード	学びのユニバーサルデザイン	学生の多様化
	精神的健康	非言語的関与
発表の概要	<p>学生の精神的健康度を可視化し、大学におけるユニバーサルデザインの改善に活かすことを目的に、大学および短期大学の学生を対象に Kessler 心理的ストレス尺度 (K10)を用いた調査を実施した。K10 スコアに基づき空間利用や支援制度の認知、相談環境を比較した結果、「一人で静かに過ごせる空間」や「交流と快適性の調和」を重視する傾向がストレスの高い学生に多くみられた。また、静穏な学習空間の確保、制度的支援の認知、情報アクセスのしやすさや教材提示のわかりやすさなど、複数の要素が精神的健康度と関係していることが示唆された。学生の多様化が進む中、モバイル端末での情報設計、オフィスアワーの周知、教職員の非言語的な関与、AI チャットボットの活用などが、より安心して学べる環境づくりに寄与する可能性がある。こうした視点は、支援の到達性と大学の質保証を高める一助となることが期待される。</p>	

学びのユニバーサルデザインをめざして —ストレス評価に基づく環境改善の取り組み—

根岸裕子 上田有里奈 柴田精一 高岡理恵
京都華頂大学・華頂短期大学教育開発センター

研究の背景・目的

多様な背景を持つ学生が学ぶ大学においては、特定の学生への個別配慮にとどまらず、誰もが使いやすい環境づくりが求められている。

そこで本研究では、Kessler心理的ストレス尺度(K10)を用いて学生の精神的健康度を指標化し、空間利用、支援制度の認知、学修環境の快適性に関する調査を通じて、ユニバーサルデザインの視点から環境改善の方向性を検討した。

ユニバーサルデザイン(UD)とは調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲ですべての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計をいう(国連「障害者の権利に関する条約(CRPD)」第2条)

方法

■ 対象
・大学生322名、短期大学生204名
・うち回答者 大学生219名、短期大学生134名(全体回答率 67.3%)

■ 手続き
2025年7月に、オンラインで質問紙調査を実施(Google Forms)

- 主な調査項目
- Kessler心理的ストレス尺度(K10)による精神的健康度
 - 空間利用のしやすさ・静穏性・交流のしやすさ
 - 支援制度の認知・利用経験
 - 学修環境の快適性(教材提示、ICT活用など)
 - 情報アクセスのしやすさ

- 分析方法:
- K10スコアによる群分け
K10高群(≥25):精神的健康度低い
K10低群(<25):精神的健康度高い
 - アンケート項目はクロス集計のうえカイニ乗検定を行い、順序尺度はMann-Whitney U検定を実施
 - 自由記述を含む質的分析

■ 倫理的配慮
京都華頂大学・華頂短期大学研究倫理審査委員会の承認を経た(許可番号:25004)。
アンケート回答方法を無記名式とし、研究目的と調査参加の自由、データ公表時の匿名性の保障などを文面で説明し、回答の送信をもって調査に同意したものとみなした。

結果

表1 学生が求める空間ニーズの重要度評価とK10スコア群別の傾向

			K10低群(n=213)		K10高群(n=140)		合計(n=353)		p値
			人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	
個人的・心理的安心感	一人で過ごせること	重要視する	76 (35.7)	69 (49.3)	145 (41.1)	0.003	K10高群は「一人で過ごせる空間」を重視 👉 対人への抵抗感		
		どちらでもない	79 (37.1)	49 (35.0)	128 (36.3)				
		重要視しない	58 (27.2)	22 (15.7)	80 (22.7)				
人が少なく混雑していない	重要視する	170 (79.8)	120 (85.7)	290 (82.2)	0.165	K10低群は「友人と一緒に過ごせる」「おしゃべりできる」を重視 👉 つなかりに安心感			
		どちらでもない	38 (17.8)	17 (12.1)			55 (15.6)		
		重要視しない	5 (2.3)	3 (2.1)			8 (2.3)		
自習や課題ができる	重要視する	164 (77.0)	118 (84.3)	282 (79.9)	0.082				
		どちらでもない	40 (18.8)	20 (14.3)		60 (17.0)			
		重要視しない	9 (4.2)	2 (1.4)		11 (3.1)			
社会的交流・つながり	友人と一緒に過ごせる	重要視する	158 (74.2)	84 (60.0)	242 (68.6)	0.004	「友人と一緒に過ごせる」は「重要視しない」が両群とも一定数存在 👉 多様性への配慮		
		どちらでもない	12 (5.6)	15 (10.7)	27 (7.6)				
		重要視しない	43 (20.2)	41 (29.3)	84 (23.8)				
	おしゃべりができる	重要視する	164 (77.0)	83 (59.3)	247 (70.0)	<0.001			
		どちらでもない	38 (17.8)	38 (27.1)	76 (21.5)				
		重要視しない	11 (5.2)	19 (13.6)	30 (8.5)				
物理的快適性・機能性	移動しやすい	重要視する	143 (67.1)	100 (71.4)	243 (68.8)	0.521	「自習や課題ができる」「移動しやすさ」「座り心地」は全体で高い重要度 👉 共通する基本的ニーズ		
		どちらでもない	53 (24.9)	26 (18.6)	79 (22.4)				
		重要視しない	17 (8.0)	14 (10.0)	31 (8.8)				
	椅子の座り心地	重要視する	164 (77.0)	104 (74.3)	268 (75.9)	0.632			
		どちらでもない	37 (17.4)	30 (21.4)	67 (19.0)				
		重要視しない	12 (5.6)	6 (4.3)	18 (5.1)				
コンセントが利用できる	重要視する	120 (56.3)	91 (65.0)	211 (59.8)	0.087	💡 空間設計には「心理的状態 × 機能性」の視点が必要!			
	どちらでもない	56 (26.3)	32 (22.9)	88 (24.9)					
	重要視しない	37 (17.4)	17 (12.1)	54 (15.3)					

表2 大学内支援制度の認知と相談環境の評価

		K10低群(n=213)		K10高群(n=140)		合計(n=353)		p値
		人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	
オフィスアワーの認知	知っている、利用したことがある	18 (8.5)	23 (16.4)	41 (11.6)	0.242			
	知っているが、利用したことはない	59 (27.7)	36 (25.7)	95 (26.9)				
	言葉は知っているが、内容はわからない	52 (24.4)	28 (20.0)	80 (22.7)				
	知らない	84 (39.4)	53 (37.9)	137 (38.8)				
教員への相談	多くの教員に相談しやすい	126 (59.2)	59 (42.1)	185 (52.4)	<0.001			
	一部相談しにくい教員がいる	62 (29.1)	46 (32.9)	108 (30.6)				
	あまり相談しやすいとは感じない	24 (11.3)	27 (19.3)	51 (14.4)				
	相談しやすい教員はいない	1 (0.5)	8 (5.7)	9 (2.5)				
事務窓口や職員への相談	多くの職員に相談しやすい	122 (57.3)	62 (44.3)	184 (52.1)	0.006			
	一部相談しにくい職員がいる	43 (20.2)	26 (18.6)	69 (19.5)				
	あまり相談しやすいとは感じない	31 (14.6)	37 (26.4)	68 (19.3)				
	相談しやすい職員はいない	17 (8.0)	15 (10.7)	32 (9.1)				

学生を一個人として認識し、身体動作・視線・表情・対人距離・姿勢といった非言語的な手法、「雰囲気」が持つ情報伝達の重要性を理解することが求められる。特に、精神的健康に課題の見られる学生は、対人関係に抵抗を感じ、相談行動をとりにくい可能性があるため、教職員によるより積極的な声かけや関与が重要である。

表3 K10スコア別の授業支援環境の使いやすさに関する評価

		K10低群(n=213)		K10高群(n=140)		合計(n=353)		p値
		人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	人 (%)	
シラバス	読んで理解できるので講義内で説明は必要ない	28 (13.1)	17 (12.1)	45 (12.7)	0.361			
	講義内でポイントだけ簡単に説明して欲しい	159 (74.6)	98 (70.0)	257 (72.8)				
	講義内で丁寧に説明してほしい	26 (12.2)	25 (17.9)	51 (14.4)				
ポータルサイト	非常に使いにくい	8 (3.8)	15 (10.7)	23 (6.5)	0.052			
	やや使いにくい	41 (19.2)	32 (22.9)	73 (20.7)				
	普通	92 (43.2)	51 (36.4)	143 (40.5)				
	ある程度使いやすい	58 (27.2)	36 (25.7)	94 (26.6)				
春学期情報サイトの使いやすさ	非常に使いやすい	14 (6.6)	6 (4.3)	20 (5.7)	0.047			
	非常に使いにくい	4 (1.9)	9 (6.4)	13 (3.7)				
	やや使いにくい	16 (7.5)	12 (8.6)	28 (7.9)				
	普通	92 (43.2)	64 (45.7)	156 (44.2)				
	ある程度使いやすい	77 (36.2)	45 (32.1)	122 (34.6)				
	非常に使いやすい	24 (11.3)	10 (7.1)	34 (9.6)				

K10高群では情報システムを「使いにくい」と感じる学生が多く、全体でもスマホでの閲覧のしづらさや文字の小ささ、情報過多などが自由記述で指摘された。こうした声を踏まえ、情報提供にもユニバーサルデザインの視点が求められる。

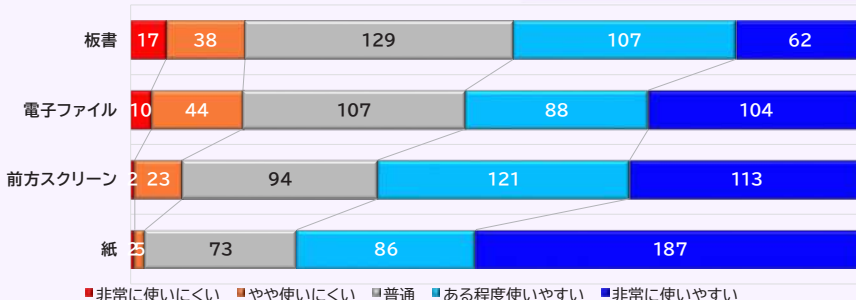


図1 講義資料の使いやすさ

紙の安心感とデジタルの機動力。教材の併用は、学修スタイルの多様性に応じた柔軟な学びを支える。

学びのユニバーサルデザインに向けた提案

- ✦ モバイル前提の情報設計(視認性・導線・通知)
👉 文字は大きく、情報はシンプルに!
- ✦ 多様性に配慮した空間設計
👉 静かな場所と交流の場を意識した環境整備

- ✦ 紙教材とICTの併用による柔軟な提示
👉 見やすさ・使いやすさを両立
- ✦ 教職員の非言語的関与とオフィスアワーの周知
👉 対人関係に不安を抱える学生への声掛け、表情・姿勢での配慮



9. 京都橘大学

テーマ	共に歩む課題解決	
発表代表者	山本 博:京都橘大学 情報システム課・課長	
連名発表者		
キーワード	伴走支援	ほどく・共感する
	良質な問い立て	文化人類学的アプローチ
発表の概要	<p>「パフォーマンスは関係性から生まれる」という考えのもと、教務課との対話から始まった伴走による課題解決の試みは、学生支援や人事課など計 7 課へと広がった。伴走を通じて職員は自走し、これまでできなかったことに挑戦できる効力感を得た。これにより、苦手分野でもモチベーションが高まり、取り組みサイクルが加速している。私たちは「つくる・届ける」にとどまらず、「ほどく・共感する」ことから始めることで、課題を対話的に整理し、最適な設計を模索し続けている。このプロセスで AI を多用しその効用を実感したが、取り組みの結果の質は、いかに良質な問い立てができていくかによって大きく左右されることにも気付かされた。この経験から、文化人類学的視点を取り入れた研修開発に至っている。本発表では、この一連のプロセスを紹介する。</p>	

24年度に始まった伴走による課題解決(業務改善)の試みは計7課での協働につながった。このとき心掛けたのは従来の役割期待である「(システムを)つくる・届ける」にとどまらず、その前段階の「(業務を)ほどこく・共感する」から始めること。課題を共に対話的に整理し、最適な設計を模索しながら進めたことが学内と情シスとの関係「再」構築にもつながった。課題解決では、ツールとして生成AIを多用し効用を実感した一方で次の課題も生まれてきた。それは「取り組みの結果の質はいかに良質な問いが立てられるかによって大きく左右されること」への気付きである。この経験から、25年度には文化人類学的視点を取り入れた研修開発に至っている。本発表では、この一連のプロセスを紹介する。

Keyword (伴走型支援) (ポストAI) (問いを立てる力) (文化人類学) (技術的課題と適応課題)

対話と試行錯誤の歩み…実践のナラティブ

■「何が問題か」の仮説づくり

情報システム課 課長として赴任
～2024年9月頃～

- ・校内の全課長(21名)と面談
- ・課内の定常業務の実践と観察

課外から見える「情シス」像
・保守課さん
・伺してるかわからない
・導入のときに伴走してくれない

課内の動きの参与観察
・業務委託の方などの調整役
・システム維持で手いっぱい

情シスは 保守する人・遠い存在

■目指す姿の発信と対話

目指している姿と体制

これからは利用者起点の業務サービスづくりを通じた「価値創造」「改善」を協働していきたい!

■教務課との先行取組

～2024年10-12月～

「生成AI×Pythonを通じたデータ処理系業務の負荷軽減」(リスクリング&協働)

伴走の流れ(データ処理系業務の一例)

「問いに向き合うツールのひとつとして」「文化人類学」

■成果(第一段階)

直接的な「作業効率化」以上に

- ・学内における関係構築
- ・各部署(他者)のまなざしへの理解
- ・学内からの見え方の更新

■他の部課への拡がり

- ・看護
- ・医療系事務課
- ・学生支援課
- ・総務課
- ・生涯教育・通信教育課

国際系事務課
人事課

に展開

システムを受注・制作(外注)し、保守する情シスから現場の課題解決をシステムの協働制作で支援する情シスへ

■研修(各部課横断)の企画

「ポストAI時代の問いを磨く～文化人類学から学ぶ3日間～」

2025年12月～2026年1月

◇研修のゴール

- ・問うとは何かを自分の言葉で説明できる
- ・インタビューや対話を通じて問いをアップデートできる
- ・部署の課題解決に繋がる問いを提示できる

「文化人類学的態度で業務に向き合う」

講師: 甲川公
(東京大学先端科学技術研究センター・特任准教授)

■新たな「問い」の生成

生成AIを使いこなしても/使いこなすほど、取り組みの結果の質は、いかに良質な問いが立てられるかによって大きく左右されるのでは?

今ある業務を効率化した先にある、大学職員の仕事とは何か?

■研修の成果

～参加者～
12部課の部長・課長・課長補佐16名
情報システム課の課員1名

～参加者の感想(一部抜粋)～

以前は既存の枠組みの中で一本の道筋を作る思考に留まっていたが、研修を通じ「前提を疑う」「誰にとっても合理的か」など多方面から物事を見る視点を得ました。

他者との対話を通じて情報を整理し、具体と抽象を行き来しながら考えることで、問題の本質がより明確になることを実感しました。

AI時代にこそ必要な「人間ならではのスキル」を再発見できる、非常に刺激的な研修でした。

今回の気づきや受け止めをなんとか園内に「輸入」できたいとは思っています。

「仮説検証」から「問いの生成へ」 一対話的なプロセスで問いの芽を育てる

講師: 比嘉夏子
(合同会社メッシュワーク・山梨県立大学 特任准教授)

◇研修のコンセプト

- ・生成AIに対し、人間の役割を「身体的知性」に基づき実世界と結びつけた「意味(記号指地)」を生成することに再定義
- ・あらかじめ決まった枠組みの中で正解を探す「仮説検証」から、枠組みそのものを疑い新しい視点を生み出す「問いの生成」へのシフト

◇研修のコンセプト

- Day1 問いを立てる: (業務における)身体的知性の言語化 宿題: フォールドワーク(インタビュ)の実践
- Day2 問いを書き換える: 問いを再生成し、業務で現場が動ける「納得感のある物語(ナラティブ)」を探る

補足と見立て

(発表者とUCI Lab. 渡辺の対話による)

■UCI型プロジェクト

UCI Lab. 合同会社が提唱実践するUser Centeredなイノベーション創出のための4つの取り組みプロセス

■ピープルウェア

「実際のところ、ソフトウェア開発上の問題の多くは、技術的というより社会的なものである。」

「ピープルウェア 第3版(トム・デマルコ・ティモシー・リスター著、松原友夫・山浦恒夫・長尾高弘訳、2013年、p3)」

■問題解決型支援と伴走型支援

「地域共生社会に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進に関する検討会(地域共生社会推進検討会)の最終とりまとめ(概要)」(厚生労働省、2019年、p6)より一部改変し作成

技術的課題と適応課題

- ・**技術的課題:** 問題の原因と解決の正解が明確で、専門知識や既存の手法で対処できる課題。
- ・**適応課題:** 答えが明確でなく、既存の知識や方法で解けない課題。当事者が試行錯誤しながら学び、自らが変わることで乗り越える必要がある。

「最難関のリーダーシップ」(ロナルド・A・ハイフェッツ著 水上海人訳、2017年)

実践における関わり方の変化

現状のアセスメント

個別に課題整理と解決の実践→横展開

研修を通じリーダー層への問題意識の投げかけ

2026年度は…

各部課内での「価値創造」に協働

実践から学んでいくPBL(Project Based Learning)型の取り組みを共に立ち上げ、ファンリテラする存在へ?

考察と今後の課題 (発表者とUCI Lab. 渡辺の対話による)

効率化だけでなく、創発的な取り組みに伴走する情報システム課へ

- ・伴走とは、既に見ている課題を順番に解くものではなく、他者との対話から徐々に問題と答えが形作られていく試行錯誤の歩み
- ・DXや生成AI導入などで既存の学内業務が効率化され、業務時間に占める割合が今後大きく減少することが予想される
- ・従来の職務やスキルセットが揺さぶられて、複雑で絶え間なく変わっていく問題に協働する能力が求められるように
- ・職員にも学生のように探求型の学び(5D)が、組織には対話型の組織開発(OD)が求められるのでは
- ・その時、情報システム課は自分たちの役割を「制度に基づくシステム構築と保守運営」に留まることなく、「複雑な課題を共に解きながら、結果として情報システムに具体化する」対話相手へと変化させていくべきではないか

10. 同志社大学

テーマ	大学院生のアカデミックスキルセミナー補助活動から見たプレFDとしての可能性	
発表代表者	趙 智英:同志社大学 学習支援・教育開発センター 助教	
連名発表者	日比野 希歩:同志社大学 大学院文学研究科 博士後期課程 3年生 山本 尚平:同志社大学 大学院法学研究科 博士後期課程 4年生 浅野 けやき:同志社大学 大学院神学研究科 博士後期課程 3年生 大谷 紗也加:同志社大学 学習支援・教育開発センター 特定業務職員 藤井 友紀:同志社大学 学習支援・教育開発センター 特定業務職員	
キーワード	アカデミックスキルセミナー	アカデミックスキル
	プレFD	大学院生
発表の概要	同志社大学では、大学での学びに必要なアカデミックスキルを身につけることを目的としたアカデミックスキルセミナー(以下、セミナー)を実施している。一部のセミナーは大学院生が補助スタッフとして登壇し、講師とともに進行を担う。セミナーの補助活動を行った大学院生からは、活動を通して自身のアカデミックスキルの再認識や、教授法への理解の深化があったとの声が寄せられ、これらの実践を通してセミナーの補助活動が単なるサポートにとどまらず、教育者としての視点を育むプレFDの場として機能している可能性が示唆される。本発表では、LAによるセミナー補助活動の具体的な実践内容を紹介し、プレFDとしての効果について報告する。	

大学院生のアカデミックスキルセミナー補助活動から見た プレFDとしての可能性

趙 智英 (同志社大学 学習支援・教育開発センター)

山本 尚平 (同志社大学 大学院 法学研究科)

大谷 紗也加 (同志社大学 学習支援・教育開発センター)

日比野 希歩 (同志社大学 大学院 文学研究科)

浅野 けやき (同志社大学 大学院 神学研究科)

藤井 友紀 (同志社大学 学習支援・教育開発センター)

1. 背景・目的

同志社大学では大学での学びに必要なアカデミックスキルを身につけることを目的としたアカデミックスキルセミナーを実施している。一部のセミナーは大学院生が補助スタッフとして登壇し、講師とともに進行を担う。

本ポスターでは、セミナーの補助活動として大学院生がどのような役割を担っているのか紹介し、その活動が学習支援の観点でどのような効果があるか、大学院生の学びにどのような効果があるか報告する。

2. アカデミックスキルセミナーの概要

- ▶ 春学期、秋学期に^{対面/オンライン}で実施。
- ▶ 学部・学年問わず参加可能・予約不要。
- ▶ セミナーのテーマ: レポートの書き方、本の読み方、プレゼンテーションの仕方、スライド作成法、メールの書き方、授業の受け方、ノートテイキング、論理的思考力の鍛え方、オンラインツール・AIの使い方に関するテーマなど。
- ▶ 対面セミナーはラーニング・コモンズ内のオープンスペースで実施し、自習中の学生も「ながら」参加可能。

▶ 学生の参加待ちではなく講師が学生らの空間に

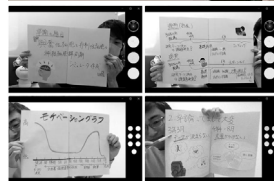


2025年度秋学期アカデミックスキルセミナーチラシ



セミナーを補助する 大学院生の役割

講師とのアイデア出し、スライド作成補助、学部生の頃の経験談、研究・学習に使用しているツール紹介、アカデミックスキルズについて解説 など



オンライン形式のセミナーの一部。大学院生が卒業研究の体験談について、手書きのグラフィックやイラストを活用する場合もあった(画像は趙・矢内(2022)より引用)。

3. 取り組みの可能性

学習支援という観点から

- ▶ 一方向の講義型からの変化
 - ・受講者が直接対話に参加しなくとも周囲で対話が行われている状況に同調して学習意欲が向上(田澤・福地 2019)
 - ・ワイプに映る非言語的表出性がプレゼンに対する満足度を高め、興味を維持する効果(伊藤ほか 2022)
 - ⇒ 講師+誰かの存在・対話が学びに影響する可能性
- ▶ セミナーテーマの幅を拡大
 - ・お茶の水女子大学による質問紙調査では大学院生の体験談を盛り込んだセミナーは実施後に高評価を得た(韓 2019)
 - ⇒ 大学院生の参画によってアカデミックスキルズ+@としてテーマの幅を拡大(卒業論文、卒業研究の進め方、スケジュールの立て方など)
 - ⇒ よりリアルで親近感のあるセミナーが可能に

大学院生の学びという観点から

研究活動では深く意識してこなかったアカデミックスキルについて、その具体的な内容や実践方法をどのように説明したらよいか、改めて考えるきっかけになった。

セミナーで学んだ聴衆の興味を引く話し方やボディランゲージは、教育実習で授業をする際に、あまり集中できていない生徒の関心を惹くことに活かすことができた。

自身の研究分野ではレジュメを用いた口頭発表が多く、今までスライドを用いた発表をしたことがなかったため、広い空間における視認性の高いデザインのスライドを用いた発表の仕方、伝え方を学ぶことができた。

非常勤講師として授業を担当する前に、セミナーの補助活動を通して学生の前で話す経験を積むことができたため、授業を円滑に進めるコツが掴めた。

4. 今後の展望・課題

- ▶ 他大学の事例(大学院生主体のセミナー企画および運営(大和田・松野 2016, 韓 2019)、各大学院生の専門を活かした、学外への出前授業(中野ほか 2011)など)を参考に、「講師と大学院生」に加え「大学院生のみ」、「異分野の大学院生同士」によるセミナーを実施するなど、多様な形態にも発展し得る。

自身の専門と関係のある授業や学会発表ではない
セミナーの聴衆に向けたアウトプットを通して自身のアカデミックスキルへの理解度、話し方や視線の使い方を振り返り内省する機会、専門外の議論の機会を得る

セミナーの補助活動を通して大学院生が教壇に立つ疑似体験をし、何らかの気づきを得て、いずれ自身の研究や教育活動に活かせるような経験になることが期待される(趙・矢内 2022)

学生に対する学習支援だけでなく
大学院生自身の成長の機会としての側面
⇒ プレFDとしての可能性

参考文献

伊藤 哉ほか(2022)「ワイプに映る人物の非言語的表出性がプレゼンテーション視聴に与える影響」『情報処理学会ワークショップ2022論文集』情報処理学会, pp.79-85
大和田 康代・松野 渉(2016)「学習支援は「学生視点」から! : ラーニング・アドバイザーとの協働(特集「大学図書館 今後の展望」)」『図書館雑誌』110(12), 日本図書館協会, pp.758-759
田澤 美智子・福地 健太郎(2019)「対話型授業により受講者の同調を促す没入型講義システムの提案」『第24回日本バーチャルリアリティ学会論文集』日本バーチャルリアリティ学会, pp.1D-01
趙 智英・矢内 真理子(2022)「2021年度アカデミックスキルセミナー実施報告」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』13, 同志社大学学習支援・教育開発センター, pp.35-43
中野 享香ほか(2011)「新潟大学発「女性大学院生によるサイエンス・セミナー(出前授業)」の取組とその効果」『工芸教育』59(3), 公益社団法人日本工芸教育協会, pp.88-92
韓 嘉雯(2019)「ラーニングコモンズと学習支援活動の実態と課題—お茶の水女子大学附属図書館の実践報告から—」『大学図書館研究』113, 国公立大学図書館協力委員会, pp.2046-1-2046-10

11. 京都産業大学

テーマ	ファシリテーションの DX ～作りながら考えるファシリテーションの可能性～	
発表代表者	澤 宏司: 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(F工房) 嘱託職員	
連名発表者	大島 和美: 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(F工房) 特定専門員 安達 晃輝: 京都産業大学 情報理工学部 3 年生 今村 湧亮: 京都産業大学 法学部 3 年生 貝増 祐斗: 京都産業大学 経営学部 2 年生 川上 雄大: 京都産業大学 理学部 2 年生 北浦 慶人: 京都産業大学 文化学部 2 年生 金城 昂汰: 京都産業大学 情報理工学部 1 年生 神谷 拓海: 京都産業大学 経済学部 4 年生 重野 聖空: 京都産業大学 経済学部 4 年生 田丸 遼人: 京都産業大学 情報理工学部 3 年生 櫛岡 翼: 京都産業大学 文化学部 2 年生 山下 達也: 京都産業大学 情報理工学部 2 年生 矢尾 衣織: 京都産業大学 文化学部 2 年生	
キーワード	ファシリテーション	学生ファシリテータ
	授業支援	DX
発表の概要	<p>京都産業大学 教育支援研究開発センター F 工房は、ファシリテーションを全学に広げるための拠点である。その F 工房の「学生ファシリテータ(学ファシ)」は、文・理の多様な学部から集まった、学生の主体的な学びを支援する学生ボランティアスタッフである。学ファシのチーム「FCDX」は、ファシリテーションにおける DX の可能性を模索すべく、2025 年夏から漸次的に組織された。現在は、リアルタイムの音声・画像認識による対話支援、近距離無線通信による入退室支援など、3～4 のプロジェクトが進行している。FCDX は技術開発のみが目標ではなく、その開発過程でのファシリテーション自体の洞察、また技術やプログラミングになじみが少ない学生のプログラミングへの啓発など、多様な波及効果が期待される。本報告では現在進行中のプロジェクトの状況を、その課題とともに具体的に示す。</p>	

ファシリテーションのDX — 作りながら考えるファシリテーションの可能性 —



京都産業大学

学生ファシリテータ

安達晃輝(情報理工学部3年次)

川上雄大(理学部2年次)

神谷拓海(経済学部4年次)

磯岡翼(文化学部2年次)

教育支援教育開発センター事務室F工房職員

今村湧亮(法学部3年次)

北浦慶人(文化学部2年次)

重野聖空(経済学部4年次)

矢尾衣織(文化学部2年次)

澤宏司

貝増祐斗(経営学部2年次)

金城昂汰(情報理工学部1年次)

田丸遼人(情報理工学部3年次)

山下達也(情報理工学部2年次)

大島和美



Fちゃん
(学ファシキャラクター)

はじめに

京都産業大学 教育支援研究開発センター F工房は、ファシリテーションを全学に広げるための拠点である。そのF工房の「学生ファシリテータ(学ファシ)」は、初年次向けの授業を中心にグループワークの円滑な進行をサポートするボランティアの学生スタッフであり、アイスブレイクの進行や受講生同士の話し合いのサポートを通して学生の主体的な学びを支援している。学ファシのプロジェクトチーム「FCDX」は、「DX×ファシリテーション」の標榜のもと、2025年夏から半年間活動を行った。文・理10学部が集まる一拠点総合大学という特性を生かし、情報系に強い学生とそうでない学生が意見を出し合って「DXを交えたファシリテーション活動」とは何かについて検討した。具体的には、リアルタイムの音声・画像認識による対話支援、近距離無線通信による入退室支援など、複数のプロジェクトが進行している。DXには手続きの具体的な検討が欠かせず、すなわちそれはファシリテーションの省察につながる。学ファシ活動の中でDXを推進することだけでなく、その過程の中で「どのようなファシリテーションが生み出されるのか？」という点にも注目してほしい。

活動内容

1) 対話支援

1-1) 概要

本システムは議論の内容から単語抽出・出力を行い議論の内容把握の補助をすることが目的である。本システムでは議論の内容を取得し、取得したデータに形態素解析を行い、名詞の抽出をする。その後、TF-IDFで数値化を行い、数値の高い上位10個の出力を行う(図1-1)。以上の内容をシステム終了まで繰り返す。システム終了後、x軸を時間、y軸を単語の数としてグラフの出力をする(図1-2)。また、会話内容、出力した単語、取得した単語とその出現回数はWordファイルに保存される。

1-2) 課題

本システムの課題として音声取得の精度がある。議論内容の音声取得を行うが、話した内容を適切に取得できていない部分があるため、別の音声取得する方法を考える必要がある。

1-3) ファシリテーションとの関連

重要な単語を可視化することにより、議論での補助に役立ち、議論の活性化を促せると考える。



図1-1 単語の出力例



図1-2 出力単語数の変化

3) オープン缶バッジ

3-1) 概要

バッジに描かれたQRコードを読み取ることで、個人ごとの記録ページにアクセスできる(図3-1)。これにより、学ファシとしての活動を記録、証明できる。学ファシを対象とするオープンバッジの発行の代替として始動した。現時点では毎年、半期に渡り行う研修を記録する。記録ページは毎年3月の缶バッジ交付に合わせて新しいものに更新する。



図3-1 缶バッジ(左)とオープン缶バッジ(右)の比較

3-2) オープンバッジとは?

オープンバッジは、取得した資格や学習内容を目に見える形にし、能力を証明するデジタルマーケティングツールである。欧米を中心とする大学や資格認定団体、グローバルIT企業など、共通したプラットフォームで展開されている。

3-3) オープンバッジとの比較

共通プラットフォームであるオープンバッジと比較して、カスタマイズ性が高くなる。個人が行った活動に特化したものとなるため、企画の概要やそこにおける役割など柔軟に付け足していくことが可能である。

3-4) 課題

記録ページの更新にかかる労力はどのくらいであるか。現時点ではバッジのデザイン(図3-2)やページは未完成であるため、実装には時間がかかる。



図3-2 オープン缶バッジのデザイン例。外円の色で学年を表し、内円の色で経験などを表す

3-5) 今後の発展

個人の記録ページ内に研修以外のイベントの参加、運営の実績を記載する。本人が行ってきた活動を目に見える形で記録することでその証明と積極性の向上を図る。

2) 入退室支援

2-1) 概要

本システムは、従来紙媒体で記録していたF工房の入退室管理を電子化し、あわせてリアルタイムで在室中のメンバーを確認できるようにすることを目的とする。入退室の記録方法は、学生証番号をパソコン上で入力する方式に加え、迅速な認証を実現するため、学生証をカードリーダーにタッチする方式にも対応させた。また入退室のログをデータ化することで、入退室履歴の管理が容易になる。システムの構成は、ExcelのVBA機能をアプリケーションとして用い、NFCカードリーダーとPythonを連携させることで、学生証のタッチによる認証を可能にしている。図2-1はアプリ画面を、図2-2は学生証での認証の様子、図2-3は入退室のログ表示を示している。

2-2) トライアル結果

学ファシに所属する複数の学生を対象として、本システムによる入退室認証のトライアル運用を実施した。その結果、従来の紙とペンによる記録と比較して、1人あたりの記録時間が短縮され、よりスムーズに入退室管理を行えることが確認できた。また、別端末から学生の在室状況をリアルタイムで確認できることから、学生や教職員間の連携が従来よりも円滑になると考えられる。

2-3) 課題

現時点での課題として、在室状況を他者から閲覧されないようにする「シークレットモード」の実装が未完了である点が挙げられる。

2-4) 今後の展望

課題を修正後、ファシリテーション研修での100名近くの学生の出席確認への活用や、F工房への本格導入を通じて、学ファシ内のDX推進をさらに進めていく。



図2-1 アプリの画面



図2-2 学生証での認証



図2-3 入退室ログの表示

4) Q&Aシステム

4-1) 概要

本システムはファシリテーションに関する問題を出題することで、他者の考えを知ることが目的である。問題の答えは他者が答えた内容にすることで考えの共有を行う。図4-1は、問題に答える画面であり、図4-2は答えを確認する画面である。

4-2) 今後について

学ファシ全員が容易に作問できるように、問題投稿システムの作成を行う。

4-3) ファシリテーションとの関連

問題に答えると同時に他者の答えと比較することで、自分の考えの幅が広がる。また、問題作成を各個人で行えるようになれば自分の悩みを他者が答えてくれる。これによって、悩みの改善にもつながる。



図4-1 問題に答える画面



図4-2 答えを確認する画面

まとめ・今後の活動について

- ・このプロジェクトを始めるにあたり、主にプログラミングをするメンバーとアイデアを出すメンバーの二手に分かれている。後者は、プログラミングに全く触れてきていないメンバーであり、プログラミングでどこまで何が出来るのか把握できていなかった。そのため、プログラミングに関する勉強会(図5)を始めた。
- ・プログラミングの勉強会は不定期で開催した。主に3~4人の少人数での会で行い、プログラミングの基礎を学んだ。
- ・今後FCDXを本格的に進めるにあたり、勉強会を継続して開催する。また、定期的に集まる会にすることで、学ファシ同士の交流の場になりうる。



図5 勉強会で使ったスライド

12. 龍谷大学

テーマ	“学生主体”の支援が生み出す学び 龍谷大学ライティングサポートセンターによる相談対応と学生スタッフに及ぼす効果	
発表代表者	島村 健司: 龍谷大学 ライティングサポートセンター ライティングスーパーバイザー	
連名発表者	萩野 翔太: 龍谷大学 文学研究科 仏教学専攻 博士後期課程 4年生 神林 声: 龍谷大学 文学研究科 日本史学専攻 博士後期課程 4年生 笹原 有貴: 龍谷大学 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程 2年生	
キーワード	ライティングセンター	スチューデントジョブ
	アカデミック・ライティング	学生参画
発表の概要	<p>龍谷大学ライティングサポートセンターでは、大学院生のライティングチューターが中心となり、龍谷大学生のレポートや卒業論文など文章作成にかんする相談を受けつけている。相談対応では、答えを教えるのではなく、相談者の考えを尊重し、課題解決の方向性を共に探る姿勢を大切にしている。また、当センターでは、ライティングチューターに対する支援として、定期的な研修のほか、学期ごとにルーブリックを活用してチューターが自己評価を行い、自身のチューターとしての成長度や大学院生としての成長を可視化している。本ポスターセッションでは、学習支援およびスチューデントジョブの 2 つの観点から、具体的な取り組みとその成果について紹介する。定量的なデータだけでなく、相談者アンケートおよびチューター成長度評価の自由記述の内容を通して、相談者とチューターそれぞれの視点に目を向け、支援のあり方とその効果の一端を複眼的に捉える試みである。</p>	

“学生主体”の支援が生み出す学び 龍谷大学ライティングサポートセンターによる 相談対応と学生スタッフに及ぼす効果



<発表者> 島村 健司 (代表：龍谷大学 ライティングサポートセンター ライティングスーパーバイザー)
萩野 翔太 (龍谷大学 文学研究科 仏教学専攻 博士後期課程 4年生)
神林 声 (龍谷大学 文学研究科 日本史学専攻 博士後期課程 4年生)
笹原 有貴 (龍谷大学 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程 2年生)

ライティングサポートセンターの概要

- 目的** ● 龍谷大学生のレポートや卒業論文などのライティングにまつわる事柄を支援すること。
- 理念** ● 論理的に考える能力を養い、それにもなう表現の技術を高める。
● 読み書き能力の向上にとどまらず、分析力を高める。
- 基本姿勢** ● 学生に考えさせる。(指導ではなく、アドバイス)
● アカデミックライティングの範疇で対応する。(各研究分野の専門的な内容に踏み込まない。)

龍谷大学ライティングサポートセンターについてはHPをご覧ください↓



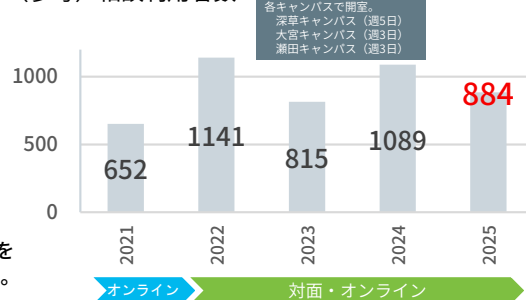
- キーワード
- ライティングセンター
 - スチューデントジョブ
 - アカデミックライティング
 - 学生参画

2025年度の相談者アンケートの分析

一部設問について、10段階(10<良>~1<悪>)の回答をもとに平均評価を紹介する。(回答数 360件)

- 相談対応に満足した **9.41**
- 自分の考えを引き出した **8.91**
- 相談対応のポイントが適切 **9.47**
- 話が分かりやすい **9.46**
- 自分からも話せた **9.22**
- 1人ですすめていけそう **8.76**

(参考) 相談利用者数



「今回の利用についてご意見、ご感想があれば、ぜひ教えてください。」に回答した118件の自由記述を分析した。そのほとんどがポジティブな意見であることから、満足度につながる要因を探ることとした。

縦軸：A(直接教示) / B(対話・コーチング) / C(姿勢・環境)
横軸：①(スキル獲得) / ②(思考整理) / ③(心理変容) の3×3のマトリックスで区分した。

	①(スキル獲得)	②(思考整理)	③(心理変容)
A(直接教示)	知識や具体的な方法の獲得 ●● レポートの基本や引用・参考文献の書き方などについて、具体例を交えて示すことが満足度につながっている。 例)「曖昧だったレポートの書き方について知ることができた」	疑問の解消や行動手順の明確化 ● アドバイスを説明により、今後の進め方や方向性が明確になっている。 例)「レポート作成の順序が分かり、今後やることが明確になった」	意欲・自己効力感への波及 ● 説明されたことから得た知識や解決する方法を知ったことから、とりもむ意欲や自信に影響している。 例)「言われたことを意識してレポートを書いていきたい」「4年間で文章力が伸びたと考えている」
B(対話・コーチング)	対話によるスキルの習得 対話から知識や能力を深め、実践的なスキルを身につけることにつながっている。 例)「自分の言葉で意見を言うことをサポートしていただき大変良かったです」	対話による考えの整理・明確化 ● 対話・傾聴を通じて、方向性が決まった、テーマが決まった、やる事が明確になった、考えが整理されたなどの意見が多くみられた。 例)「考えがよくまとまらないうちに相談したが、親身にお話を聞いていただいたことで自分の頭の中の整理もついた」	対話による自発性の喚起 対話によって自分からアクションを起こそうとするにつながっている。 例)「質問を沢山してくれたので自分の意見も言いやすかった」
C(姿勢・環境)	対応姿勢による多様な方法の発見 答えや結論を押し付けない姿勢が多様な方法の発見につながり、かつ気楽さを演出している。 例)「本の探し方についてもコレだと押し付けず色々な方法を捻出して一番やりやすい方法を使っていたと言ってもらえて気が楽になりました。」	安心して話せる雰囲気や思考整理を後押し 漠然としたことや言語化できないことなど、適切に聞き取る姿勢が安心して話せる雰囲気や環境をつくっている。 例)「自分からも話せる環境で相談しやすかった」	安心感、満足感、再利用意欲の向上 ●●●● 丁寧さ、優しさ、安心感など情緒的満足にかかわる評価が多い。それらがモチベーションの向上などにつながり再度の利用にもつながる可能性がある。特に、初めて利用した者やレポートをこれから書くこととしている者への心理的バリアの低さと安心感が評価されている。 例)「とても丁寧に対応して下さり助かりました。また利用したいです。」

ライティングチューターの自己成長の認識と相談者満足度の関連性

龍谷大学ライティングサポートセンター(WSC)を担うのは、龍谷大学の大学院生(26名 *うちチューター・リーダー11名 ※2025年度)である。彼らの質の高い支援は、体系的な研修と継続的な成長評価によって支えられており、彼らの成長は大学院生としての成長にもつながっている。

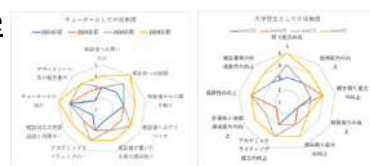
チューターの成長度評価の自由記述から読み取れる自己成長の認識と相談者による満足した点の関連性を分析した。

<成長度評価のためのルーブリック>

ライティングチューターとしての成長度評価 (A: 満足、B: やや満足、C: 普通、D: 不満)

項目	1	2	3	4
知識の習得				
対話技術				
環境構築				
自己成長				

sample



	チューターの認識(自己成長の記述より)	相談者の認識(アンケート自由記述より)	統合された支援効果(複眼的考察)
A(直接教示)	「アカデミックライティングの基本を資料なしで説明できる」など、知識の習得と伝達力を認識している。	「レポートの書き方がわかった」「引用・参考文献の疑問解消」など、即効性のある知識とスキル獲得を実感している。	【知識の定着と即効性】:チューターが反復練習で得た知識が、相談者の曖昧な点を解消する上で、すぐに役立つツールとして機能している。
B(対話・コーチング)	「本質的な課題の引き出し」「相談者なりの答えにつなげる」など、対話技術の向上を認識している。大学院生として、質問力、情報を整理する力を認識している。	「頭の中の整理がついた」「話を引き出してくれた」など、思考の整理・明確化という対話の成果を実感している。	【高度な対話技術の一致】:成長したチューターの対話スキルが、相談者の「思考整理」という形で明確に効果を発揮しており、支援の質の核となっている。
C(姿勢・環境)	「他のチューターとの協力」「後輩への指導・研修」など、組織内での協調性・リーダーシップの向上を認識している。	「優しく相談しやすい」「とても丁寧」「また利用したい」など、安心感と再利用の意欲が実感されている。	【環境構築の成功】:チューターのプロフェッショナルな姿勢が、相談者にとっては「優しさ」「丁寧さ」として認識され、心理的な安全性を提供している。これが「もっと早く来ればよかった」という相談学生の思いに繋がっており、センターの存在意義を確立している。

チューターとしての成長、大学院生としての成長が

- ライティングサポートセンターの相談の質向上
- チューターにとってはスチューデントジョブとして今後のキャリアに役立てる経験

につながっている。今後も、相談者、チューターの双方の成長となるよう、ライティングサポートセンターを運営していく。



13. 同志社女子大学

テーマ	薬学教育における主体的学修基盤の形成～アカデミックスキル演習の実践～	
発表代表者	小谷 晶子:同志社女子大学 薬学部 特任教授	
連名発表者	西村 亜佐子:同志社女子大学 薬学部 特任助教 山内 雄二:同志社女子大学 薬学部 准教授 根木 滋:同志社女子大学 薬学部 教授 芝田 信人:同志社女子大学 薬学部 教授	
キーワード	アカデミックスキル	薬学教育
	主体的学修基盤	
発表の概要	<p>本学では 2024 年度新カリキュラムより、大学における主体的学修を早期に定着させることを目的として、1 年次春学期に「アカデミックスキル演習」を導入した。薬学は基礎系から医療系に及ぶ広範な学修が求められる学問領域であり、薬剤師として社会に貢献するためには幅広い知識と自己調整型学修力が不可欠である。本科目では、与えられた課題に対して自ら主体的に行動し探究する姿勢を身につけることを重視し、その基盤形成を支援することを狙いとしている。授業は、研究倫理を含む学修導入、情報リテラシー、ストレスマネジメント、ヘルスリテラシー、アサーティブコミュニケーションなどの横断的スキルに加え、物理・化学・生物の基礎系科目の効果的な学び方、レポート作成などのライティング技法、メタ認知力の育成で構成される。本発表では、授業設計の意図、実践内容、学生の反応に加え、今後の展望について報告する。</p>	

薬学教育における主体的学修基盤の形成

～アカデミックスキル演習の実践～



小谷 晶子、西村 亜佐子、山内 雄二、根木 滋、芝田 信人
同志社女子大学 薬学部

【緒言】本学では、大学における主体的学修を早期に定着させることを目的として、1年次春学期に「アカデミックスキル演習」を導入している。本科目では、与えられた課題に対して自ら主体的に行動し探究する姿勢を身につけることを重視し、その基盤形成を支援することを狙いとしている。

授業は、研究倫理を含む学修導入、情報リテラシー、ストレスマネジメント、ヘルスリテラシー、アサーティブコミュニケーションなどの横断的スキルに加え、物理・化学・生物の基礎系科目の効果的な学び方、レポート作成などのライティング技法、メタ認知力の育成で構成される。本発表では、項目「生物の学び方」にポイントを絞り、授業設計の意図、実践内容、学生の反応に加え、今後の展望について、報告する。

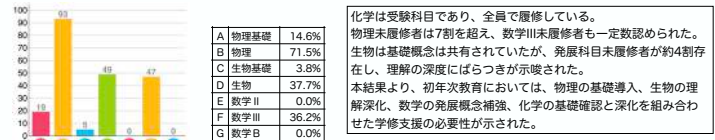
新入生オリエンテーション・アンケート (1年次生139名)

Q1. 薬学部に入学者に不安な点



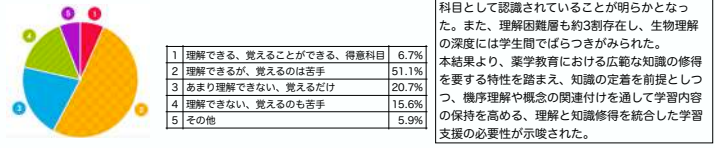
新入生の不安の中心は、「学力・学修継続・最終到達目標 (国家試験)」に集中している。特に、大学授業の難易度、高校から大学への接続、6年後の国家試験、という時間軸で連続した不安が認められる。これは、入学直後から「接続教育」へのニーズが高いことを示唆している。また、薬学部特有の6年制への心理的負担も認められた。

Q2. 高校で履修していない科目



化学は受験科目であり、全員で履修している。物理未履修者は7割を超え、数学III未履修者も一定数認められた。生物は基礎概念は共有されていたが、発展科目未履修者が約4割存在し、理解の度合いにばらつきが示唆された。本結果より、初年次教育においては、物理の基礎導入、生物の理解深化、数学の発展概念補強、化学の基礎確認と深化を組み合わせた学修支援の必要性が示唆された。

Q3. 生物科目への意識



生物科目に対する意識として、「理解できるが覚えるのは苦手」とする学生が過半数を占め、生物は概念理解は可能である一方、暗記量の大きい科目として認識されていることが明らかとなった。また、理解困難層も約3割存在し、生物理解の深度には学生間でばらつきがみられた。本結果より、薬学教育における広範な知識の修得を要する特性を踏まえ、知識の定着を前提として、構序理解や概念の関連付けを通して学習内容の保持を高める、理解と知識修得を統合した学習支援の必要性が示唆された。

どう学ぶか? ② 「基礎細胞生物学」および「機能形態学 I」の授業内容を用いて、以下の課題を課した。

【課題: 解説を作ろう】 五者択一問題を1問作成した。

学生提出物 例)

問 心臓細胞に関する記述として正しいものはどれか。1つ選べ。 1 深い溝に入り、脳波はデルタ波が主体。 2 全身の筋力が活発に動き、運動が多い状態。 3 急速な運動 (REM) がみられ、脳波は覚醒時に近い。 4 夢を見ず、脳活動はほとんど停止。 5 入眠直後に最も長く、その後短くなる。 解答: 3	問 物質の濃度勾配に逆らひ、濃度の低い方から高い方へ輸送され、輸送体が必要とし、また外部からのエネルギーを必要とする形式は? 1 単体拡散 2 促進拡散 3 膜動輸送 4 複体拡散 5 能動輸送 解答: 5
問 アセチルコリンに作用し、酢酸とコリンに分解する酵素は次のうちどれ? 1 ホスホフルクトキナーゼ 2 ATPシナーゼ 3 コリンアセチルトランスフェラーゼ 4 アセチルコリンエステラーゼ 5 ホスホジエステラーゼ 解答: 4	問 神経衝の経路として正しいものはどれか。 1 右心室→右心室→肺動脈→肺静脈→左心房 2 右心室→右心房→肺動脈→肺静脈→左心房 3 右心房→右心室→肺動脈→肺静脈→左心房 4 右心房→右心室→肺静脈→肺動脈→左心房 5 右心室→右心房→肺動脈→肺静脈→左心房 6 入眠直後に最も長く、その後短くなる。 解答: 3

<課題後のアンケート>

- 1) 問題を作った感想は?
- 2) 今後の学びにどう活かすことができるか?

例) 選択肢を考えるのが難しかった/間違えそうな選択肢を並べることで、間違えやすいポイントを自分で理解できた/何が大切な考えながら作ることで難しかった/自分が知らない選択肢が作れない/どこを出したらちょうどいい難易度になるか頭を使った

選択肢の作成や出題内容の選定の難しさを実感したとする意見が多く認められた。一方で、問題作成を通して内容を見直す機会となり、どこを重要点として捉えるかを考えるなど、高次的な思考活動を促す効果が示唆された。

理解深化や知識定着効果に加え、復習に活用したいとする意見が多かった。また、出題者視点で重要点や間違えやすい箇所を意識するようになったとする記述もあり、問題作成が今後の学習の形成に寄与する可能性が示唆された。



どう学ぶか? ③ 「5分間暗記チャレンジ」を行った。

【課題: 5分間集中して覚えよう】 授業で解説した以下の内容について、5分間で覚えた後、問題演習を行った。

■局所麻酔薬■

作用機序	神経細胞のNa ⁺ チャネル 遮断
エステル型	コカイン、プロカイン、テトラカイン、アミノ安息香酸エチル、オキシプロカイン
アミド型	リドカイン、メピカイン、ジブカイン、オキシセザイン、ロピカイン、レボピカイン、ピブカイン

- 問1 局所麻酔薬の作用機序はなにか? : OO遮断 正解率 96.2%
- 問2 局所麻酔薬の分類はなにか? : OO型とOO型 正解率 96.2%
- 問3 コカイン、リドカイン、アミノ安息香酸エチルの分類? 正解率 コカイン 87.1%、リドカイン 84.1%、アミノ安息香酸エチル 79.5%

<課題後のアンケート>

課題後の感想と今後の学習への展望は?

例) 今まで一気に暗記をしてたけどまずは5分から始めてみようと思った/5分の集中力が続きました。ちょっとでもいいから見る!! /暗記でもっとも苦手なので、5分間覚えただけで結構覚えていて感動した、これからはだんだん覚えるのではなく時間を決めてがんばりたい。

短時間でも集中することで記憶できることを実感したとする意見が多く認められた。また、一度にまとめて暗記する学習から、短時間の反復学習へと学習方法を見直す意識の変化がみられ、短時間暗記が継続的な学習習慣の形成に寄与する可能性が示唆された。

どう学ぶか? ① プレイメントテストの出題問題について「機能形態学 I」で授業後、再度演習を行った。

問1 神経細胞 (ニューロン) の構造中のア～エの名称として、正しい組合せはどれか。1つ選べ。

番号	ア	イ	ウ	エ
1	樹突	ランビエの絞縮	神経突起	細胞体
2	細胞体	ランビエの絞縮	細胞体	神経突起
3	細胞体	細胞体	ランビエの絞縮	神経突起
4	神経突起	細胞体	ランビエの絞縮	細胞体
5	神経突起	細胞体	細胞体	ランビエの絞縮

正解 4
正解率 94.1%

神経細胞構造の理解は良好であった。

- 問2 副交感神経の末端より分泌される神経伝達物質はどれか。1つ選べ。
1 ノルアドレナリン 2 アドレナリン 3 アセチルコリン
4 グルタミン 5 プロラクトン 正解 3 正解率 77.0%
- 問3 交感神経が副交感神経よりも優位にはたらくときに生じる作用として、最も適当なものを選べ。
1 胃腸のぜん動運動が促進される。 2 血圧が低下する。 3 瞳孔が縮小する。
4 気管支が拡張する。 5 排泄が促進される。 正解 4 正解率 63.7%

一方、自律神経の神経伝達物質および作用の理解には課題が認められた。機能の理解を主体的に深める学習の重要性が示唆された。

【解答解説】
問1 ア: 樹状細胞、イ: 細胞体、ウ: ランビエの絞縮、エ: 軸突 (神経細胞) 樹状突起には多数の受容体があり、神経伝達物質によってこれらの受容体が刺激されると軸突に電気的信号が発生し、神経終末まで興奮が伝導する。
問2 副交感神経の末端より分泌される神経伝達物質はアセチルコリンである。
問3 交感神経が副交感神経に比べて優位にはたらくとき、気管支拡張、心機能亢進、消化管ぜん動運動抑制などの作用のみでれる。

<学生の感想>まとめ
問題演習を通して、理解状況の確認や復習につながったとする意見が多く認められた。解答解説に対する記述から、解説は既習知識の確認や理解補助に寄与することが示された。一方で、簡潔さへの評価とともに、文章中心の解説では理解しにくいとする意見も認められ、提示形式や説明量の改善の必要性が示唆された。

【課題: 解説を作ろう】 問1~3から1問選択し、解説を作成する。

学生提出物 例)

<課題後のアンケート>

- 1) 解説を作った感想は?
例) わからないところが理解しやすかった/わかりやすく伝えるのは難しいと思った/時間がかるが理解は深まった/内容を整理することができた/自分が作るとより理解しやすかった/自分が理解できないと解説は書けない
自ら解説を作成することで、理解が深まったとする意見が多く認められ、解説作成は学習内容の整理および理解深化に寄与する可能性が示唆された。一方で、要点抽出や分かりやすい表現の難しさを実感したとする記述も多く、説明・要約力の必要性に対する気づきも促されていた。
- 2) 今後の学びにどう活かすことができるか?
例) 説明できるくらい理解したいと思う/わからないときは図を書いて理解する/難しい問題は解説してくれるくらい勉強する/解説を作るのは今後もやってみたい/これからのテストの振り返りに利用したい/内容を深く理解するのに役立つと思う
自ら解説を作成することで、理解深化や知識定着への効果に加え、要点整理や復習への活用を示す意見が多く認められた。また、調べる・考えるといった主体的学習への意識の高まりも認められた。解説作成課題が今後の学習方略の形成に寄与する可能性が示唆された。

まとめ 1年次春学期「アカデミックスキル演習: 生物の学び方」において、種々の課題を通して学生の学習支援となるよう工夫した。

- ・問題演習および解答解説の読解は、理解確認や理解促進に寄与した。
- ・解説作成や問題作成という生成的活動は、理解深化や知識定着、要点整理への気づきを促した。また、問題作成は出題者視点の形成を通じた評価視点の理解につながった。
- ・暗記課題は、短時間でも集中することで大切さを実感するとともに、学習へのハードルを下げることも、平日からの学習継続という学習方略への転換を促した。
- ・これらの体験を基に、学生の主体的な学習意欲の向上、醸成が進むことを期待する。

そう多く学生の学習意欲の向上、醸成が進む訳ではありませんが、教員として、粘り強く反復して学生の意識向上、学向上を目指して、学習支援に取り組んでいかなければならないと日々実感している次第です。

【参考】 薬剤師国家試験には、1,000種類もの医薬品が出題されます。それらの薬名を一朝一夕に覚えることはできません。本学では、学修支援の一環として、過去20回の薬剤師国家試験に出題された薬物を、薬理作用別に分類してまとめた「覚える薬理作用別クイズ」という冊子を毎年作成 (更新) し、春学期開講時に1,4および6年次の学生に配布しています。巻末には、前年度に販売開始となった新薬のリスト一覧も掲載しています。多岐にわたるクイズに、低学年のうちから少しずつ慣れ親しんでいくことができるよう、関連分野の教員の授業でも活用しています。また、薬物名を白抜きにした「練習帳」も併せて配布しています。



14. 京都女子大学

テーマ	「コモろうプロジェクト」1年目の実践 ～学生たちが主役のラーニングcommons運営を目指して～	
発表代表者	桂 まに子: 京都女子大学 発達教育学部教育学科 講師	
連名発表者		
キーワード	大学図書館	ラーニングcommons
	学生協働	主体的な学び
発表の概要	<p>2017年に開館した本学の新図書館にはアクティブ・ラーニングcommonsとメディアcommonsという2種類の学習空間があるが、残念ながらこれらの空間の存在や使い方を知っている学生は少数派である。ラーニングcommonsの運営を一から考えるために、2025年6月に大学図書館の学生ボランティア「図書活」と学生サークル「京都女子大学図書館学研究会」に声をかけ、学生たちが主体的に図書館のcommons活用を考えていく「コモろうプロジェクト」を立ち上げた。</p> <p>本発表では、前期5名、後期10名が参加した初年度の活動内容を紹介する(ラーニングcommons内にcommonsブースを常設、学外の学生協働サミットに参加・発表・学生交流、京女生のニーズに応えるデータベース検索体験会を開催)。ラーニングcommons活性化のための実践は始まったばかりである。今年度の成果と課題をふまえ、学生と教職員が協働して取り組める目標を設定し、次年度の活動につなげていきたい。</p>	

「コモろうプロジェクト」1年目の実践 — 学生たちが主役のラーニングcommons運営を目指して —

桂 まに子 (京都女子大学 発達教育学部教育学科)

第31回FD・SDフォーラム@同志社大学 2026年2月28日

ラーニングcommonsの実態

せっかく整備したラーニングcommonsなのに思ったほど使われていない・・・

2017年 新図書棟
アクティブラーニングcommons (1階) メディアcommons (地下1階)

2025年現在、大学生はラーニングcommonsのことを・・・

- 「図書室＝読書禁止」の先入観があるため、いくら綺麗が良いと言われていても使われていない。
- 図書館でディスカッションやグループワークが行えることを意識したことがなかった。
- グループワークして良い環境だと知っているが、勉強している人がいる空間で声を出すと迷惑してしまう。
- 静かな空間で、自分が先陣を切って声を出して話し始めるには勇気がある。

キャンパス内の学習空間の多様化

- 1人1台パソコン、「どこでも学べる」時代
- 大学図書館の静寂空間は学習空間に選ばれている
- 図書館内のラーニングcommonsはなぜ選ばれない?
- 話し合いをするグループワークが必要なときは、空き教室や学内の他のフリースペースで事足りる。
- わざわざ自分で静寂を破らなくていいラーニングcommonsを選ぶ発想はなかった

学内で学習する場合、最も多く使用するのは大学図書館

1位: 図書館 (56.5%)	2位: 学食 (16.3%)	3位: 空き教室 (11.4%)
-----------------	----------------	------------------

「令和7年度京都女子大学学務行動調査」(全学問系対象、2025年4月実施)より

個人学習室	研修の場にある小さな机	大講堂の前の大机	1人1台のパソコン	自修室兼読書室
読書・雑誌コーナー	新刊コーナー	読書	活動発表場	研修室
メディアcommons	アクティブラーニングcommons	グループ学習室	電卓コーナー	トイレ

図書館のラーニングcommonsに「選ばれる空間」としての価値を付けるには・・・

- 地下の穴場のような場所にある図書館のラーニングcommonsは、学生たちにとっては「わざわざ行く場所」。
- 他の学習空間にはない要素があれば、「わざわざ選ばれる」。
- 積極的に「選ばれる」には何が必要?

活用【自分のよさ】 + 自分ごと感

コンテンツ【本・雑誌・情報】 + 人的支援【学習支援】

ラーニングcommonsの運営と課題

- 学生サポーターの導入
- 教職員連携・・・ミニ講義、授業に役立つ資料リスト

大学図書館公認の学生ボランティア「図書活」
学内サークル「京都女子大学図書館学研究会」

↓

京都女子大学図書館のラーニングcommonsで「コモろうプロジェクト」を立ち上げる

私立大学図書館協会第86回研究大会 (2025年9月3日) 発表スライドより
桂まに子「学生に選ばれる学習空間になるには：ラーニングcommonsの設計から学生ワークショップまで」

1年目の目標 (2025年度)

- コモンズプロジェクトの立ち上げ&メンバー集め
- ラーニングcommonsに活動拠点を作る
→ 図書課に相談して実現
- 空きコマを使ったブース活動
- 他大学の学生と交流&活動事例を参考にする
- 京女生がラーニングcommonsに来たくなる活動案を考える



6月 コモンズブースを常設 (メンバー12名)



7月-12月 シフトを組んでブース活動

- 上手くいかなかったこと
- ✓ ブースに来てくれない (そもそも存在を知らないの、見かけても遠くから眺められているだけ)
- ✓ とりあえず始めてみてから色々改善点を探ろうとした
- ✓ 90分というシフトの中で何もできなかったこともしばしば
- ✓ 存在を広めるための宣伝が不可欠

11月-12月 ラーニングcommonsを使ってみる

- 全国学生協働サミット参加報告会 (他大学の活動を共有)
- ホワイトボードの活用 (POP展示)
- データベース検索体験会 (計3回)
- #1: 論文検索 (CiNii) & 館内の学術雑誌コーナー探索
- #2: 統計データ (総務省統計局、e-Stat)
- #3: 新聞データベース (朝日「クロスサーチ」、読売「ヨミダス」、毎日「毎索」)



10月 学生交流&他大学の活動から学ぶ

- 第27回図書館総合展@横浜に参加 (10月24日)
- 全国学生協働サミットにて、プロジェクトの進捗報告
→ 発表タイトル: ラーニングcommons大革命! ~みんなの「やってみたい」が集まる場所~



授業以外にも知的な刺激が受けられる場に!

【学部学科を超えた交流】聴いてみたいミニ講義

臨床心理学	基礎文化史	ハローワーク・キャリアセンター	図書館で聞いてみよう	教育経済学
犯罪心理学	理解科学	異業種の成長と変化、企業設計	地域で学ぶ英語	日本近代史
認知心理学	異業種の働き方	プレゼンテーションの学び	スポーツ実践	音楽

収録「聴覚特性」で見る常識の突破

学部学科を超えた交流、文化の垣根を知らず、共通の関心を持った「学びの場」を創出する

「学際性」(学問の垣根を越える) 学際性とは、異なる学問領域の知識や方法を統合し、新たな視点や解決策を生み出すことを指す。

「学際性」(学問の垣根を越える) 学際性とは、異なる学問領域の知識や方法を統合し、新たな視点や解決策を生み出すことを指す。

- 学内外の取り組みをもっと知りたい**
- らしつよチャレンジ (学生プロジェクト)
 - ジェンダープロジェクト
 - 地域連携プロジェクト

次年度に向けて (学生からの意見)

- データベース検索体験会をcommons活動の軸に置く
 - ✓ 検索スキルを身につけることは、大学生のニーズと合致する
 - ✓ 1人で検索するのではなく、学生同士教え合いながらできる
- 音を用いた空間づくり
 - ✓ commons内でBGMを騒がしくない程度にかけてみたい
 - ✓ ピアノ音楽やオルゴールなどのBGMを流すことを検討中
- SNSを活用する
 - ✓ ラーニングcommons利活用に関するQ&AをSNSにあげる
 - ✓ 利用者や利用パターンが固定化し、十分に活用されていないラーニングcommonsを学生同士や教職員との協働、情報発信の拠点として考えてもらいたい
- 他大学の図書館のラーニングcommons見学

15. 京都産業大学

テーマ	準正課・課外をする学生の成長実感調査に向けた試行的取り組み：質問紙一体型自計式フィードバックシート(SSG-7)の実施事例	
発表代表者	山野 洋一：京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 職員	
連名発表者	梶浦 真琴：京都産業大学 文化学部 4年生 伊藤 未侑：京都産業大学 文化学部 4年生 笹中 紳之介：京都産業大学 文化学部 4年生 磯貝 瑛里：京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 職員 杉江 芳隆：京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 職員 津野 十紫：京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 事務長補佐 山内 尚子：京都産業大学 教育支援研究開発センター 事務室 事務長 三田 貴：京都産業大学 教育支援研究開発センター 副センター長 佐藤 賢一：京都産業大学 教育支援研究開発センター センター長	
キーワード	準正課・課外	質問紙一体型自計式フィードバックシート
	成長実感とエンゲージメント	教員・職員・学生によるFD/SD
発表の概要	<p>筆者らは準正課などの課外活動をする学生の成長実感を測定する尺度(SSG-25)を活用し、教育実践での展開を行ってきた。さらに、本センターは、短縮版7項目成長実感尺度(SSG-7)、および短縮版の周囲の関与・学生生活の満足感・健康習慣尺度を活用し、教育実践での展開を目指している。SSG-7と関連尺度は全国2310名の大学生を対象にした調査で、信頼性・妥当性が確認されており、質問紙とフィードバックシートが一体化した自計式になっていることが特徴である。今回は試行的に準正課・課外活動等を行う大学生3名に使用した。その結果、「自身の状況を把握できる」等の内省報告を得た。一方で、詳細な成長実感や周囲の関与の程度の把握にはSSG-25が優れている。SSG-25とSSG-7を使い分けることで、目的や状況に合わせたアセスメントが可能となる。シートの使用感の詳細は当事者の学生から報告を行う。</p>	

準正課・課外をする学生の成長実感調査に向けた試行的取り組み ～ 質問紙一体型自計式フィードバックシート(SSG-7)の実施事例 ～

○山野洋一¹⁾・○梶浦真琴²⁾・○伊藤未侑²⁾・○笹中紳之介²⁾・磯貝瑛里¹⁾・杉江芳隆¹⁾・津野十紫¹⁾・山内尚子¹⁾・三田貴¹⁾・佐藤賢一¹⁾
京都産業大学 教育支援研究開発センター¹⁾・京都産業大学 文化学部4年生²⁾

はじめに

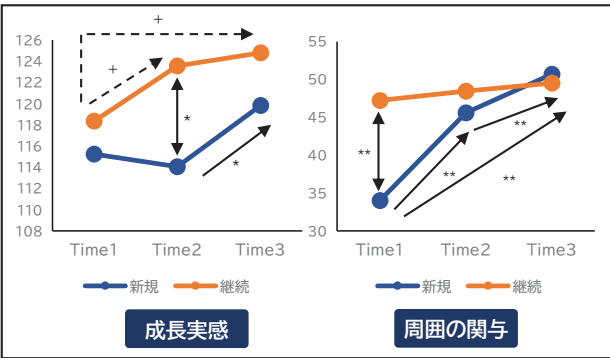
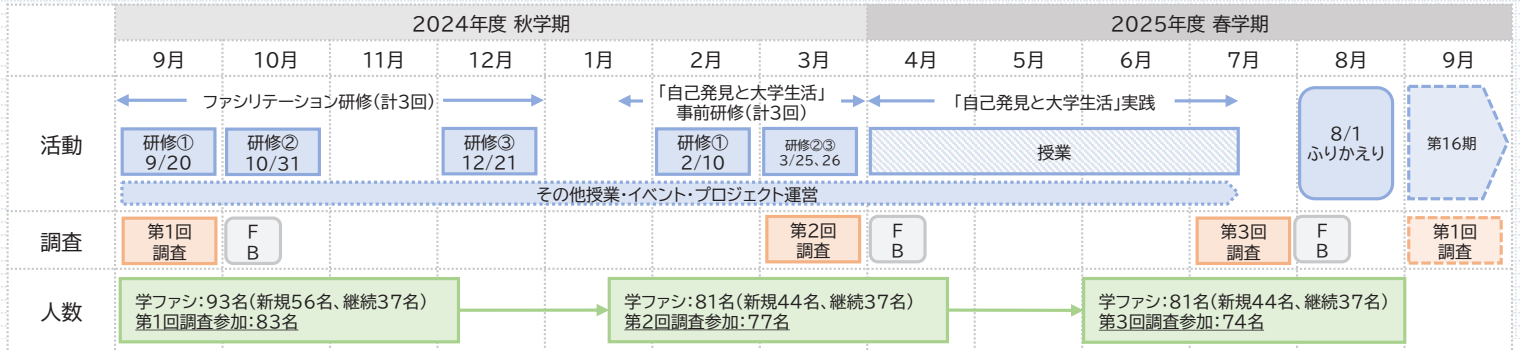
大学教育において、正課だけではなく準正課・課外活動を通じた学生の成長実感や成長実感を促すプロセスである教職員の関与を明らかにすることは、学習者主体の教育の実現に向けて重要である。京都産業大学 教育支援研究開発センターでは準正課・課外活動をする学生の成長実感やプロセスを測定する尺度やフィードバックシート(FBシート)の開発、教育・実践現場での展開を行ってきた。本報告は学生を参画させたFBシートの改良に向けた取り組みについて報告する。

これまでの本センターの準正課・課外活動をする学生の成長実感調査(SSG-25とFBシート)の取り組み

✓ 学生ファシリテータ(学ファン)15期を対象とした成長実感調査

2024年から成長実感調査を開始、3時点の調査と成長実感をFBシートとして返却、学生の成長の可視化として活用

学生ファシリテータ第15期生の活動スケジュール



✓ 成長実感調査のパッケージ(全73項目)¹⁾

1	SSG-25(成長実感尺度) 正課外活動を通じて特定の行動を実行できる自信の程度(自己効力感)
2	周囲の関与 教職員や同じ団体の学生から受けた関与の程度
3	学生生活の満足感 正課と正課外活動に対する満足感の程度
4	健康習慣 睡眠、食事、運動、適正体重の維持、薬物摂取等の健康行動
5	学生育成目標 本学のDPを人間像として自作したもの

✓ FBシート(3回まで測定・解説動画付き)



FBシート見本(SSG-25)

FBシート文献(SSG-25)

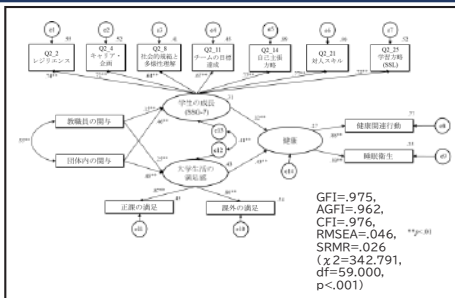
アセスメントの課題点と改善に向けた取り組み

成長実感調査の課題点

- 73項目と多くストレートラインの発生
- FBシートの作成のため即時のFBができない

短縮版質問紙一体型FBシートの作成(SSG-7)²⁾

- 全国調査の再分析
全国の大学生を対象に実施した2310名(2023年に実施)
- 平均年齢と標準偏差は20.37±1.56歳



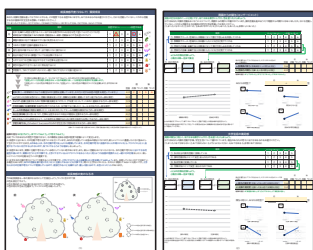
領域	項目
成長実感	Q2.2 課題の解決に向けて最後までやり抜く気持ちをもつこと Q2.4 こまめに会議や企画の連絡をすること Q2.8 国内・国外の様々な人に対して、分け隔たりにくく接すること Q2.11 自分の身近でない問題についても自分事にする Q2.14 人ができそうな仕事と自分ができそうな仕事を分担すること Q2.21 相手の強みでできていることに目を向けること Q2.25 学習面で、うまくできなかったことと一緒にうまくできたことも振り返ること
周囲の関与	Q3.1 教職員やコーチ、地域の人は親身になって喜びや悲しみを共感してくれる Q3.3 教職員やコーチ、地域の人はおもしろいことを引き受けてくれる Q3.5 課外活動(大学の先輩・後輩や友人は親身になって喜びや悲しみを共感してくれる Q3.9 課外活動(大学の先輩・後輩や友人は親身になって喜びや悲しみを共感してくれる Q4.2 私は自分の課外活動に没頭している
大学生生活の満足度	Q4.4 課外活動は私にとって安全・安心なものである Q4.6 私は学業に没頭している Q4.8 学業は私にとって安全・安心なものである Q5.1 自分にとって適切な睡眠がとれている
健康習慣	Q5.2 睡眠のリズムは整っている Q5.5 栄養のバランスのとれた食事をとっている Q5.9 過度な飲酒・喫煙・カフェインの摂取をしない

質問紙一体型自計式フィードバックシート(SSG-7)の作成と課題点のヒアリング(2026年1月に実施)

考察

- 項目の意図や用語が分かりにくいことが回答のばらつきにつながっていた。特に専門用語の解釈のわかりにくさが、学生の解釈を不安定にしていた。
- 記入方法や注意書きのわかりにくさが誤記入を招いていた。記入しやすい構成への改善が必要である。

3名の連盟学生に準正課活動前後にFBシートに記入とヒアリングを実施



学生からの使用感改善点の提案

カテゴリ	具体的記述
用語・概念の分かりやすさ	レジリエンス、SSL、学習方略などの用語説明が必要 別紙の用語集や簡易解説が欲しい 動画解説があると理解しやすい
項目の意図・解釈の明確化	「学習面」「多様性」「安心・安全」などの意味を明確にしてほしい どの軸(学業/課外活動/生活)で答えるかを明示してほしい
レイアウト・記入方式の改善	縦横の並びが急に変わるとミスが起きるので統一してほしい 色分けをもっと明確にする(黄色→青など) 計算欄の配置を分かりやすくしてほしい
ランク判定の説明強化	重要な注意書きを強調(*印、太字、色) 「プラスマイナス1点」の説明を中央の緑文に統合してほしい
自己評価の限界と他者評価の必要性	DPなどは学生の自己評価では難しい 自己評価だけでは過大評価・過小評価が起きる
項目の表現・文言の改善	「喜びや悲しみを共有」など大げさな表現は回答しにくい 喜びの共有はスポーツ系っぽく感じてしまう
調査時期・対象の明確化	研修と活動のどちらを想定して書くかの明示してほしい 括弧書きの位置が紛らわしいので改善してほしい
グラフ・図の見方の説明	関与優位型/教員優位型の判定方法が分かりにくい 平均との比較を強調して説明してほしい

ポスターダウンロード



1) 山野洋一ほか(2024)「周囲の関与が学生の成長や健康に与える効果—課外活動をする学生を対象にした全国調査からの検討—」『アカデミック・アドバイジング研究』(2)11-8.

2) 山野洋一ほか(2026)「7項目版学生の成長実感尺度と短縮版周囲の関与・学生生活の満足感・健康習慣尺度の開発:質問紙一体型自計式フィードバックシートの作成を目指して(印刷中)」『社会システム研究』(52), 2026年3月発行

16. 京都外国語大学

テーマ	外国人旅行者へのフィールド調査を通じた「多様な利用者にやさしい駅づくり」 ～JR 西日本と大学生による産学連携の実践～	
発表代表者	岩田 英以子:京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 准教授	
連名発表者	北村 桃子:京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 2年生 吉本 琢磨:京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 2年生 渡邊 のぞ美:京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 2年生 HNIN WAI AUNG:京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 2年生	
キーワード	フィールド調査	実践的学び
	産学連携	異文化理解
発表の概要	<p>本発表では、JR 西日本京都統括駅と京都外国語大学グローバル観光学科による産学連携プロジェクト「外国人観光客にやさしい駅づくりプロジェクト」の実践を紹介する。学生が“日本語や日本の文化に不慣れな旅行者”の視点から、駅の現場における課題を多面的に捉え、多言語(英語・韓国語・中国語)によるアンケートやインタビューを通じて収集・分析し、改善案を提案・実施する取組である。現場の課題に対し、学生が企業担当者と連携しながら実践的に課題解決を行う点が特徴である。本活動を通じて、学生は京都を訪れる外国人旅行者と直接対話し、大学で培った観光英語や異文化理解の知識を生かすことで、学びを社会に還元する実践的な機会を得た。本発表では、その実践の経過と成果を共有する。</p>	



外国人旅行者へのフィールド調査を通じた「多様な利用者にやさしい駅づくり」

— JR西日本*と大学生による産学連携の実践 —

京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科



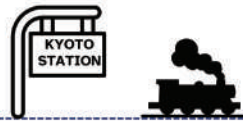
発表代表者 准教授 岩田英以子

連名発表者・学生 (2年生)

北村 桃子 / 吉本 琢磨 / 渡邊 のぞ美 / HNIN WAI AUNG

プロジェクト背景・流れ

- ・訪日外国人観光客の増加
- ・無人時間帯という課題
- ・現場の課題を、学生がフィールド調査から捉える実践的学び



JR西日本*様と
打ち合わせ

アンケート
調査

結果分析

課題抽出

無人駅
調査

成果物
制作

*西日本旅客鉄道株式会社



アンケート調査概要・結果

2025年11月5日 (水)

9:00~17:00

JR京都駅

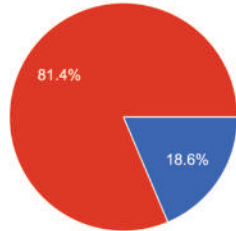
外国人旅行者カウンター内

回答者数106名 (32か国)

【出身国】	
ドイツ: 13名	韓国: 5名
アメリカ: 12名	香港: 4名
フランス: 11名	メキシコ: 4名
オーストラリア: 10名	カナダ: 3名
スペイン: 7名	オランダ: 3名 他

問8. 日本の鉄道で困ったこと・わかりにくかったことはありますか？

- はい / Yes / 有 / 예
- いいえ / No / 没有 / 아니요



●はい→内容を教えてください

チケット購入の問題

- ・チケット購入が分かりにくい
- ・オンラインサイトが使いにくい
- ・切符が複雑

言語の問題

- ・駅案内が分かりにくい
- ・外国語案内が不十分



駅・構内の問題

- ・路線が多く、複雑で分かりにくい
- ・駅構内が複雑
- ・階段・出入口が多い

無人駅調査から見た課題と制作物

【精算機の使いにくさ】

多言語モード切り替えボタンの配置やデザインが分かりにくく困っている人が多くいた。

制作物 ①

▶ 精算機の使い方説明動画

制作背景

- ・精算機の存在、使い方をあまり知られてない
- ・多言語モードボタンが見つかりにくい
- ・改札口の音声は日本語しかない

工夫した点

- ・乗り越し精算の方法
- ・チャージする方法
- ・インターホンの使い方

外国人視点でのメリット①

- ・改札から出られない場合多言語音声対応だと問題を理解する

外国人視点でのメリット②

- ・精算機の使い方が分かって、観光がよりスムーズ

TRAIN STATION



制作物 ②

▶ 駅員不在時のインターホンの使い方ポスター

制作背景

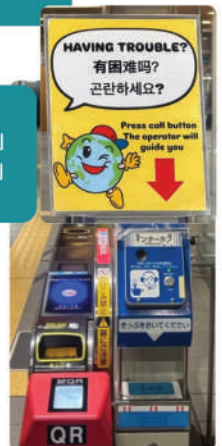
- ・駅には情報が多く (多言語案内も含む) どこを見ればいいのかわからない

工夫した点

- ・インターホンという概念を改める
- ・目につきやすく一目で理解できる
- ・多言語表記でもシンプルに

利用シーン

- ・改札が通れないなど、トラブルにあった時



【活動のふりかえり】

- ・実際に無人駅を調査して、設備が整っていても「どう使えばいいのか分からず不安になる」場面が多いと感じた。
- ・外国人の立場で駅を利用することで、普段とは違う駅の見え方に気づいた。

【課題と展望】

- ・日本の鉄道は便利だが、初めて利用する外国人には迷いやすい場面も多いと感じた。
- ・言葉だけでなく、利用者の目線に立った分かりやすい工夫が重要だと考えた。

本プロジェクトを通じて、学生自身が「利用者の立場で考えること」の重要性を実感した。

→今後駅構内での活用に向けて協議・検討を進めています。



17. 京都文教大学

テーマ	Tグループで学生は何を体験し、何を学んだのか ～京都文教大学実践社会学科「つなぐラボ演習Ⅰ」の授業実践～	
発表代表者	中西 勝彦: 京都文教大学 総合社会学部 実践社会学科 助教	
連名発表者	寺田 あゆみ: 京都文教大学 総合社会学部 総合社会学科 4年生 北尾 千夏: 京都文教大学 総合社会学部 実践社会学科 2年生 山下 遥叶: 京都文教大学 総合社会学部 実践社会学科 2年生	
キーワード	Tグループ	人間関係トレーニング
	ファシリテーション	授業実践
発表の概要	<p>京都文教大学総合社会学部実践社会学科(以下、本学科)では、プロジェクト活動を中心とした様々な「実践」を通じて、社会課題の解決に寄与する人材の育成を目指している。本学科では、プロジェクト活動に必要な6つのスキルを伸ばすための科目を「プロジェクト・スキル科目」としてカリキュラムに位置づけている。そのうち、リーダーシップやファシリテーションなど、対人コミュニケーションに関わるスキルの伸長を目的とした「つなぐラボ演習Ⅰ」では、人間関係における関係的過程を学ぶために授業内で Tグループを行っている。Tグループ(Tはトレーニングの略)は、参加者がグループで起こる「今-ここ」の人間関係のプロセスに気づき、その体験から学ぶことを目的とした非構成的なグループ活動である。本発表では、Tグループに参加した学生が、Tグループでどのような経験をし、何を学んだのかを報告する。</p>	

Tグループで学生は何を体験し、何を学んだのか

—京都文教大学実践社会学科「つなぐラボ演習Ⅰ」の授業実践—



発表者：中西 勝彦（京都文教大学 総合社会学部 実践社会学科 助教）、寺田 あゆみ（京都文教大学 総合社会学部 総合社会学科 4年生）
北尾 千夏（京都文教大学 総合社会学部 実践社会学科 2年生）、山下 遥叶（京都文教大学 総合社会学部 実践社会学科 2年生）

1. はじめに

京都文教大学総合社会学部実践社会学科（以下、本学科）では、プロジェクト活動を中心とした様々な「実践」を通じて、社会課題の解決に寄与する人材の育成を目指している。本学科では、プロジェクト活動に必要な6つのスキルを伸ばすための科目を「プロジェクト・スキル科目」としてカリキュラムに位置づけている。

6つのスキルうち、リーダーシップやファシリテーションなど、対人コミュニケーションに関わるスキルの伸長を目的とした「つなぐラボ演習Ⅰ」では、人間関係における関係の過程を学ぶために授業内でTグループを行っている。本発表では、Tグループに参加した学生が、どのような体験をし、何を学んだのかを報告する。



Tグループとは？

TはTrainingの略で、非構成的なグループ体験学習のこと。あらかじめ決まった課題や話題はなく、学習の素材は「今、ここ」で生起する対人相互作用、すなわち「関係的过程（プロセス）」そのものに置かれることが特徴。



3. Tグループの実践概要

合宿は2泊3日で実施。場所はアクトパル宇治（宇治市総合野外活動センター）

時間	内容
1日目	
17:00	現地着
17:15-19:00	チェックイン+夕食
19:00-20:30	導入セッション
2日目	
9:00-10:30	Tセッション①
10:45-12:15	Tセッション②
12:15-14:00	昼食+自由時間
14:00-15:30	Tセッション③
15:45-17:15	Tセッション④
17:30-19:00	夕食+自由時間
19:00-20:30	ナイト・セッション
3日目	
9:00-10:30	Tセッション⑤
10:45-12:15	Tセッション⑥
12:15-13:30	昼食+自由時間
13:30-15:00	振り返りセッション①
15:15-17:15	振り返りセッション②
17:30	現地発

1日目は夕方から大学を出発。導入セッションでは、アイスブレイク、Tグループの説明、合宿での自分の目標設定と共有を実施。

2日目はTセッション（非構成的なグループ体験）を4回実施。Tセッション：75分間、振り返りシート記入：15分間を1セット。ナイト・セッションは、その日の自分の行動を1人で振り返り、表現物を作成。それを全員で分かち合う。

3日目はTセッションを2回実施。振り返りセッションでは、振り返りシートをもとに、T1からT6までの個人やグループの様子をみんなで見返す。

24年参加者（現2年生）
・受講生7名
・トレーナー2名（教員+外部講師）
・オブザーバー1名

25年参加者（現1年生）
・受講生10名
・トレーナー2名（教員+外部講師）
・オブザーバー1名

2. 「つなぐラボ演習Ⅰ」の概要

本科目は、1年次を対象に秋学期開講。毎週2コマ連続の8週15回授業。2024年度より開講し、今年度で2回目の実施。2単位演習科目。

到達目標

1. コミュニケーションの「型」の重要性を理解し、説明できる。
2. 自分のコミュニケーション上の「癖」に気づき、それを言語化できる。
3. コミュニケーションにおける「プロセス」に気づくことができる。
4. 「プロセス」を大切にしたいコミュニケーションを実践するために、自分が意識すべきことを説明できる。
5. 「みんなが意見を言いやすい場」をつくるために、自分ができていることを言語化できる。

週	内容
1	コミュニケーションの基礎（1対1/グループ）
2	話し方・聞き方 / 場のづくり方
3	敬語・言葉遣い / ビジネスマナー実践
4	非構成的なグループ体験①②
5	非構成的なグループ体験③④
6	非構成的なグループ体験⑤⑥
7	非構成的なグループ体験を振り返る①②
8	この授業での学びをまとめる

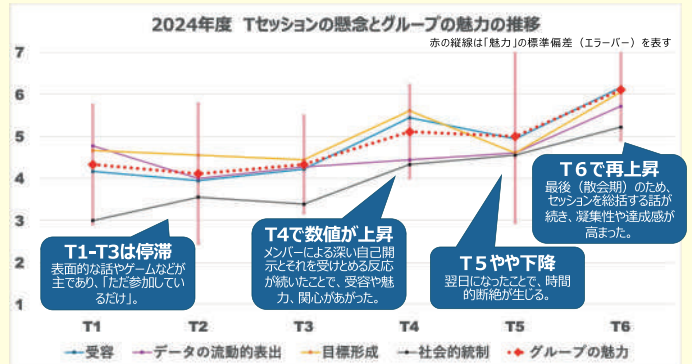
本科目は人と人をつなぐスキルの基礎を習得する科目。具体的には、「どうすればメンバーみんなが意見を言いやすい場をつくれるか」という問いに、対人コミュニケーションにおける「型」と「プロセス」の視点から考え、自分らの解(=スタイル)を探究する。授業の第4週から第7週までを合宿形式で集中的に実施。

4. Tセッション中のグループの様子（24年度の事例）

Tセッション後の振り返りシートに「4つの懸念(Gibb,1964)」をもとにした質問（7件法：各懸念2項目）とグループに対する魅力を探る質問（7件法）の計9問を設けた。その回答を集計したのが以下の図である。

「4つの懸念」（以下の説明が肯定される場合、懸念が「低減されている状態となる」）

- 受容懸念：自分が大切にされ、安心して参加できている実感があるか。
- データの流動的表出懸念：自分の意見や感情を隠さず表現できているか。
- 目標形成懸念：取り組んでいることへの関心や参加実感があるか。
- 社会的統制懸念：メンバー相互に影響を与え合っている状態か。



5. 学生は何を体験し、何を学んだのか？（事後アンケートの分析結果）

事後アンケートの実施

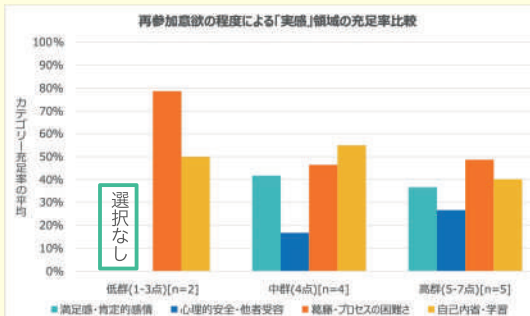
2026年2月に、参加経験者全員（1年生、2年生とも）に実施。11名から回答を得た。（1年生7名、2年生4名）

問：「Tグループ」全体を振り返り、あなたの「実感」に近いものをすべて選んでください。

カテゴリ	質問項目	回答数
満足感・肯定的感情	楽しかった	5
	ワクワクした	2
	充実感があった	3
	終わるのが名残惜しかった	5
	スッキリした	1
心理的安全・他者受容	参加しよかった	5
	安心した	1
	受け入れられたと感じたメンバーを身近に感じた	3
葛藤・プロセスの困難さ	難しかった	8
	怖かった	7
	もどかしかった	5
	沈黙が苦しかった	8
	精神的に疲れた	8
	孤独を感じた	3
自己内省・学習	モヤモヤが残った	2
	自分を見つめ直せた	9
	ハッとした（驚きがあった）	5
	自分の癖に気づいた	5
	新しい発見があった	6
	納得がいった	1

「沈黙の苦痛」や「精神的疲労」といった強い葛藤を伴う体験だったが、一方で「自分を見つめ直せた」等の自己内省項目が最多となった。肯定的感情や安心感よりも葛藤や難しさの実感が伴う、高負荷・高学習な体験であったことが窺えた。

「あなたはTグループにもう一度参加してみたいと思いますか？」の回答を3群に分け「実感」の各カテゴリをどれくらい選択しているかを集計した。



全群で「葛藤」と「自己内省」は高い実感がある。低群は「満足感」と「安全性」が0%、かつ「葛藤」が80%という極端な値を示した。高・中群は葛藤を抱えつつも「満足感」や「受容感」を得る多面的な実感を得ている。

再参加意欲の鍵は、学びの有無ではなく、それを支える情緒的土台の構築にあると考えられる。

Tグループの中で印象に残っている場面は？

Tセッションが始まるまではみんないつも通りの仲良く話していたが、Tセッションが始まった途端、壁を作られた気になって他人みたいに感じた。

沈黙が最初あったのがいやだったこと
1人の発言がきっかけで皆が胸の内をさらしていったこと
趣味や思い出話から、個人の話に移っていったあの瞬間。やって良かったなとそこで実感できた。

Tグループとしての正解かどうかは置いて、本音で話してくれた人がいたこと。

最後の振り返りセッションで、Tセッションの中でこんなこともあったなって思い出した。このメンバーで深く話せるのもTセッションだけだと思えば、寂しい気持ちになった。

Tグループの体験をひとことで表すと？

己と向き合う対話の場	誰も正解が分からない話し合い
新たな自分への道	貴重な場
新しい自分をみんで探す	再熟
意図的セッション	絆
意外と涙を使う。	疲労

日常の「仲良く」が「他人」になる緊張や沈黙を越え、誰かの勇気ある本音をきっかけに深い自己開示へと場が動く。正解のない対話の中で、学生は葛藤と疲労を経験しながらも、自分を深く見つめ直し、他者との絆を実感した様子が窺えた。

18. 龍谷大学

テーマ	さまざまな授業形式に対応した授業観察ポイント一覧とルーブリックの検討～授業観察学生の視点から～	
発表代表者	寺川 史朗:龍谷大学 法学部 教授	
連名発表者	小林 珠子:龍谷大学 学修支援・教育開発センター 専門員 大西 春叶:龍谷大学 文学研究科 東洋史学専攻 修士課程 1 年生 中道 彩晴:龍谷大学 経済学部 現代経済学科 2 年生	
キーワード	授業観察	教育改善
	学生参画	ルーブリック
発表の概要	<p>龍谷大学では、2021・2022 年度に「学生による授業観察」プロジェクトを実施し、その成果を基に 2023 年度から「学生による授業観察に基づく授業支援」を全学で推進している。2025 年度は取り組み 3 年目となる。授業観察に際し、観察学生は事前に授業担当者と打ち合わせを行い観察のポイントを聞き取るとともに「授業観察ポイント一覧表(以下、一覧表)」を用いて授業観察を行う。2025 年度は「一覧表」をもとに、ルーブリックを作成した。「一覧表」とルーブリックはともにさまざまな授業形式に対応できる内容になっているが、講義形式を想定した項目が多く含まれている。授業観察では、AL 形式の授業を観察する機会もある。また今後はオンライン授業を観察対象とする予定である。本発表では、講義形式以外の授業観察において有用な「一覧表」およびルーブリック作成に向け必要な視点・項目について観察学生と検討した結果について報告する。</p>	

学生の授業観察にもとづく授業改善



発表代表者 寺川 史朗 法学部・教授

研究概要

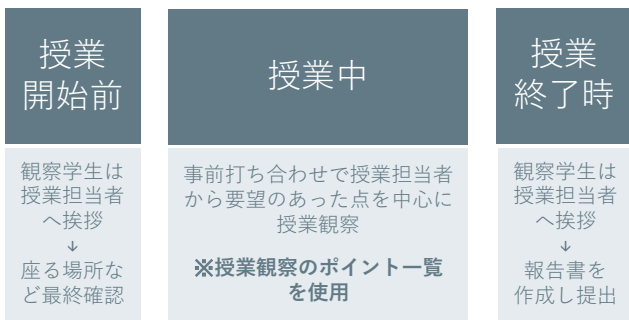
学修者本位の教育が求められるなか、学生の視点に立った授業改善を進める一環として、学生による授業観察制度を整備し実践する。「龍谷大学基本構想400」では、「学生一人ひとりの学びへの思いや考えを取り入れて学修者本位の学びへと転換」すること、ならびに、「学生の参画を得て、教学改革を促進する組織文化を醸成する仕組みを検討する」ことが謳われている。この取り組みは、学生の参画を得て、学修者本位の学びへと転換するような授業改善を進めるところに目的があり、全学的に教育力の向上を図ることが期待される。

研究内容

授業観察の流れ



授業観察当日の流れ



研究成果

観察学生のAL型授業経験、オンライン授業経験の状況

- AL型授業用&オンライン授業用授業観察ポイント一覧の作成を目的としたミーティングを開催するため、観察学生に参加可否を尋ねたところ、深草学舎、瀬田学舎それぞれ3名ずつ観察学生が集まった。
- ミーティング参加学生に、大学の授業におけるAL型授業の経験とオンライン授業の経験を尋ねたところ、以下のような結果となった。
- この結果を踏まえ、現在使用している授業観察のポイント一覧をベースに、深草学舎ではAL型授業用、瀬田学舎ではオンライン授業用の授業観察ポイント一覧を作成した。

深草学舎		瀬田学舎
多い	AL型授業経験	少ない
少ない・ほぼない	オンライン型授業経験	多い

観察学生から出た意見 (AL型授業用授業観察のポイントについて)

- グループワークで話し合いや作業をしている場面で先生が学生に声をかける時があるが、そのタイミングや声の大きさが気になる
- グループワーク中の机間巡視のタイミングも気にしてほしい。
- グループワークをしている時に、盛りあがっていないグループが無いが、盛りあがっていないグループがいる場合、適切に声かけをしているかなどが気になる。
- 特定の学生のみ負担が偏っていないか把握してほしい。また、偏らないように工夫してワークの指示を出してほしい。

AL型授業用&オンライン授業用授業観察のポイント一覧作成の経緯

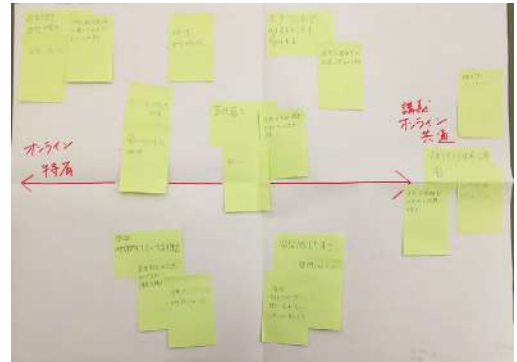
- 「授業観察のポイント一覧」は観察学生同士、意見交換しながら作成した。
- 一部の観察学生から「授業観察のポイント一覧」が使いつらい授業があるとの意見が寄せられた。使いつらい授業とはどのような授業か聞いたところ、グループワーク中心の授業であるとの回答が得られた。
- 「授業観察のポイント一覧」は、講義形式の授業を想定し作成された。そこで今回、講義型授業以外にも活用できるAL型授業用、オンライン授業用のポイント一覧を作成することとなった。

基本的な動き	話す	話す速さが適度である
	書く	板書が整理されている。
	見る	チョークの色使いに統一感があるなど工夫されている (小中高校では実践している先生が多い。大学ではあまりない)
	聴く	教員の視線がおおむね受講生に行き渡っている
	動く	教員の動線が均等である。1か所にかたよっていない
教材の使い方	教科書	教科書の使い方が授業内容を理解するのに役立っている
	レジュメ	レジュメの分量が適度である (授業内容全てを書き込んでいないレジュメは採点済む。少なすぎる分量だとノートをとるのに間に合わない)*6
		レジュメが教科書と関連づけられている
		プレゼンテーションソフトの使い方が授業内容を理解するのに役立っている
授業の方法	授業形態	双方向、対話形式の授業になっている (双方向ではないが40~60分程度までであれば可能)
	視覚的教材	映像や画像など視覚教材を適度に用いている (90分全編録画なしとしない。適量が多い)*5
	実物の提示	授業に関連する実物を提示する*1
授業の進行	授業時間	授業時間の使い方が工夫されている (遅い遅いを入れることもあり得る)*4
	受講生の反応	受講生の反応を察しながら授業を行っている (90分集中するのは難しい。適度そうにすれば問題を覚えて関心を呼び起こしたり、気分転換したりする)*7
授業の内容	興味関心	授業の中で受講生が興味関心を持つような問いを提示している (授業開始時に問いを提示することでその答えを考えながら集中して聞くことができる)
	参加意識	研究や調査のテーマを受講生が自由に選べるようにしている (おもに実習や演習の授業で)
	課題提示	授業の中でresponのアンケートやクイズカードを用いて結果を受講生に見せている (他の受講生がどのように考えているかが分かる)
課題や試験	課題	授業の中で課題を提示している
	応答	授業の中で提出された課題やコメント、質問に対し応答、フィードバックをしている (受講生は複数人いるが)
	試験説明	授業の中で試験内容や範囲について説明している (試験直前ではなく、毎回説明してくれるとそのポイントが分かるし試験勉強にも役立つ)
LMSの使い方	課題提示	manaba course などを使って課題を出している
	補助教材	manaba course など授業の補助教材や自己学習のための資料を提示している (専門分野でない学生にとって役立つ)
授業全体	雰囲気	質問しやすい、話しやすい雰囲気をつくっている*3
	到達目標	各回の授業においてシラバス記載の到達目標を達成できるような進行や構成になっている

観察学生から出た意見 (オンライン授業用授業観察のポイントについて)

- 低い声だと聞き取りづらいことがあるので、普段教室で話す声よりも少し高めの声で話してほしい
- 画面を見ていて目が疲れるので、授業の合間に少し休憩を設けてほしい。
- 皆が入室している状態だと気になって質問しづらいので、質問する方法を工夫してほしい。また、いつ質問したら良いか質問のタイミングを指示してほしい。
- ほかの学生と交流する時間がほしい。先生の説明が正しく理解できているか不安な時があるので、受講生同士で相談する時間がほしい。
- (出来上がった一覧をみて) オンライン特有の観察ポイントもあるけど、授業運営に大切なのはベースは講義型もオンライン型も同じだと気づいた。

観察学生のプレストの様子 (オンライン授業用授業観察のポイントについて)



今後の課題

課題はおもに次の2点である。

1 所属学舎ごと・学生ごとに経験している授業形式にばらつきがある

AL型授業用&オンライン授業用授業観察のポイント一覧を作成するにあたり、観察学生にどのような形式の授業を履修しているかを尋ねたところ、学舎間の差が大きいことが明らかとなった。観察学生が授業観察を担当する科目は、講義型・AL型・オンラインいずれの可能性もある。受講経験の少ない授業形式にも適切に対応できるよう授業形式ごとの特徴などを知るための研修を行うなど対策が必要である。

2 報告書作成の作成・提出に必要な時間が観察学生ごとに大きく異なる

2025年度新規採用となった観察学生8名が研修として授業観察を担当した。授業観察後には報告書を作成し授業担当者に提出するのだが、この報告書作成に要する時間が観察学生による大きく異なった。報告書の提出が遅れることで、観察学生が指摘した内容を授業担当者が授業改善に生かすタイミングを逃すこともある。したがって、希望する授業担当者には、授業観察後すぐに口頭で授業観察の結果をフィードバックするなどの方法も検討していきたい。

19. 京都産業大学

テーマ	学生スタッフ「LINK」主導の多言語イベント実践報告 ～言語学習を目的とした学生主体の準正課活動の事例として～	
発表代表者	ハフマン 美亜:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室(グローバルコモンズ 学習支援担当)職員	
連名発表者	和田 潤青:京都産業大学 外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ロシア語専攻 4年 吉田 壘:京都産業大学 外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ドイツ語専攻 4年 小嶋 智廣:京都産業大学 法学部 法律学科 3年 レイシー アンドレア:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ 学習支援担当 杉江 昌子:京都産業大学 教育支援研究開発センター事務室 グローバルコモンズ 学習支援担当	
キーワード	学生スタッフ	多言語イベント
	準正課・課外	主体的な学び
発表の概要	<p>京都産業大学グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」は、準正課の学生主体の活動として、英語ディスカッションをはじめ、外国語学習や異文化理解を目的としたイベントを幅広く実施している。定期開催するロシア語・ドイツ語・フランス語などの多言語会話イベントは、対象言語や文化に関心をもつ学生が集い、交流しながら学び合う場となっている。本発表では、各言語イベントを担当する学生が、参加者との対話の進め方、自作カードゲームなどを用いたアクティビティ、運営上の工夫など、具体的な実践を紹介する。また、メンバー自身の「言語が好き」「もっと学びたい」という思いがイベントの企画・実施にどのように反映されているかにも触れる。さらに、活動への関与を通して生まれた意識や学習意欲の変化を学生の視点から報告し、多言語イベントでの運営経験が自己成長へとつながったプロセスを、準正課活動の実践例として共有する。</p>	



京都産業大学

背景と目的

京都産業大学のグローバルコモンズ (GC) では、学生ボランティアスタッフ「LINK」が中心となり、外国語や異文化に触れながら学生同士をつなぐイベントを実施している。英語イベントを基盤として、ロシア語・ドイツ語・フランス語などの多言語イベントも継続的に実施している。本発表では、これら3つの多言語イベントを取り上げ、概要や実績、運営上の工夫を実施者である学生スタッフの視点から報告する。また、学生の外国語学習への意欲がイベントの実施・継続にどのように結びついているのか、さらに、イベントへの主体的な関与や参加が生み出す学びや成長、そして学生は活動経験を授業や実社会、将来のキャリアなどにつながると感じているのかについて、学生自身の活動を振り返りながら明らかにする。

グローバルコモンズ学生ボランティアスタッフ「LINK」実践報告

～多言語イベントを通じた学生の主体的な学び～

ハフマン 美亜 (教育支援研究開発センター事務局 グローバルコモンズ学習支援担当)
杉江 昌子 (教育支援研究開発センター事務局 グローバルコモンズ学習支援担当)
アンドレア・レイシー (教育支援研究開発センター事務局 グローバルコモンズ学習支援担当)

和田 潤青 (外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ロシア語専攻 4年)
吉田 星 (外国語学部 ヨーロッパ言語学科 ドイツ語専攻 4年)
小嶋 智廣 (法学部 法律学科 4年)

定期開催の「話そう！」イベントの概要と運営上の工夫

「ロシア語で話そう！」

【概要】
2022年秋学期にロシア人交換留学生の提案で開始したロシア語の会話イベント。
2023年度以降は、ロシア語学科の学生が引き継いで主導している。今年で4年目。
【2025年度実績】
通年 毎週月曜 (12:20～13:00)
参加者数 (延べ) 159名



【アクティビティ】
参加者同士、ロシア語を使ってフリートークやボードゲーム、手作りのオリジナルかるたなどで楽しむ。

初學者向けの勉強会では、文法や語彙表現など基本事項の説明をロシア語専攻の上回生が行う。中上級は、ロシア語を使った会話アクティビティ。ロシアの文化や歴史、スラブ言語の言語学的な比較などについて、日本語やロシア語で議論が行われる。

【イベントの様子・特徴】
参加者は主にロシア語専攻の学生だが、他学部の学生の参加もある。世界情勢の影響で、今年度はロシア人留学生が不在。ロシアに関心がある学生同士が集い、互いに切磋琢磨しながら学習に取り組む姿が見られる。

「ドイツ語で話そう！」

【概要】
2023年5月に開始して以来、週1回の定期イベントとして開催。今年で3年目。ドイツ語専攻のLINKが中心となり運営。参加者は、ドイツ語専攻のほか、他学部のドイツ語学習者もいる。留学生の参加も多い。
【2025年度実績】
通年 毎週月曜 (12:20～13:00)
参加者数 (延べ) 195名



【アクティビティ】
参加者のドイツ語レベルは様々なので、参加者全員が楽しめるよう工夫している。

・日常会話 (トピック: 自己紹介・趣味・音楽・旅行・家族など)
・カードゲーム: ヘッドバンズ・AGO ※展示あり
・自作のカードゲーム (2種類) : 会話が弾むオリジナルトピックを3つのレベルに編成 (参加者のレベルに応じて選択)

【イベントの様子・特徴】
2～3人のドイツ人留学生がコンスタントに参加。ネイティブならではの文法や語彙の説明、スラングやジョーク、ドイツの文化背景について学ぶことができる。

「フランス語で話そう！」

【概要】
2025年7月にスタート。かねてよりリクエストの多かったフランス語の会話イベントが、フランス語学習者のLINKスタッフ2名により実現した。
【2025年度実績】
通年 毎週金曜 (12:20～13:00)
参加者数 (延べ) 75名



【アクティビティ】
参加者のレベルや希望に応じて、二つのグループ (初級・中上級) に分けてアクティビティを行う。

・初級: 「フランス語の文化や訪れたい町」「フランス語を学び始めたきっかけ」などについて日本語で話す。
・中上級: フランス語での会話や意見交換
・混合レベル (初～上級): カードゲーム (ヘッドバンズ)

【イベントの特徴】
初回の開催では、11名が参加した。参加者の希望で継続的な定期開催となる。まずは、月2回の実施、10月以降毎週定期的開催。留学生から発音やフレーズを学びながら、参加者が積極的に交流する様子が見られた。

その他の多言語イベント (2025年度開催分)

「スペイン語で話そう！」

スペイン語学習者や興味のある人対象。簡単な日常会話の練習やゲーム、雑談など参加者のレベルに応じてスペイン語に触れる機会を提供する。
【2025年度実績】
通年 1～2回/週 (12:20～13:00)
参加者数 (延べ) 66名



「韓国語で話そう！」

韓国人留学生を囲んで、韓国語で会話を楽しんだり、日本語で韓国文化について語り合うイベント
【2025年度実績】
春学期 1回 & 秋学期 5回 (計6回)
参加者数 (延べ) 147名



「中国語で話そう！」

カードやゲームを通じて中国語と中国文化を楽しく学ぶイベント。中国人留学生が、簡単な日常会話や接客やビジネスで使える便利な表現や文化背景を解説。
【2025年度実績】
春学期 1回
参加者数 (延べ) 7名



「日本語で話そう！」

主に留学生対象。参加者の日本語レベルに応じて日本語で楽しく会話したり、カルタやけん玉などの日本文化を体験する。
【2025年度実績】
通年 1～2回/週 (12:20～13:00)
参加者数 (延べ) 190名



「ウクライナ語で話そう！」

ウクライナ語を話すドイツ人交換留学生が企画。ウクライナ語の基本表現やウクライナ文化について学ぶイベント
【2025年度実績】
秋学期 2回
参加者数 (延べ) 15名



「世界の言語を学ぶ会」

特定の言語に関心のある人を対象とした語学勉強会。学んでみたい言語について、参加者同士で文法を中心に基礎から学ぶ学習型イベント。
【2025年度実績】
春学期 1回/週
参加者数 (延べ) 30名



参加者の声

【調査概要】

■調査目的
イベント参加者へのインタビューを通して、参加による学びや成長を明らかにし、今後のイベント運営の改善につなげることを目的とした。
■調査対象者:
2025年度に定期開催された多言語イベントロシア語・ドイツ語・フランス語の話そうイベント参加者
■調査時期: 2025年2月
■調査方法: インタビュー調査
■回答者数: 計4名
内訳: 「ロシア語で話そう！」参加者: 1名
「ドイツ語で話そう！」参加者: 2名
「フランス語で話そう！」参加者: 1名

- ① 参加した動機やきっかけ
・フランス語を学習中なので、少しでも話す機会を増やそうと思ったから。(フランス語)
・ドイツ人留学生に誘われたから (ドイツ語)
・「ロシア語で話そう！」の主催者が他に開催したイベントに参加したから (ロシア語)
② 良かった点
・わからない単語を教え合っていたこと (フランス語)
・ドイツ語を話すことに抵抗がなくなったこと (ドイツ語)
・一人で勉強しづらい言語を勉強できたこと (ロシア語)
③ 感想
・初回開催時は沢山の参加者がいたが、その後からだんだん参加者が減っていったため、話すことが減ったけど楽しかった (フランス語)
・誰でも参加していい雰囲気良かった (ドイツ語)
・学部や学年が違うロシア語学習者と交流できたこと (ロシア語)

イベント担当者 (LINK) の活動振り返り

- Q1) 得たこと・学んだことは?
・ イベントをスムーズに進行するファシリテーションスキルが身についた
・ レベルに応じた参加者への対応能力が向上した
・ 自ら積極的にコミュニケーションを取れるようになった
・ 主催としての責任感
・ イベントの運営の仕方がわかった
Q2) 活動の中で、将来に活かせると感じた経験は?
・ イベント企画力
・ ポスター作成など広報活動
・ 集客のための声掛け
・ 外国語を使った接客や対応
Q3) 課題点や後輩に託すことは?
・ 留学生の参加促進するコミュニケーション
・ 留学生に依存しない体制を作る
・ 参加人数の把握
・ アクティビティの種類
・ 参加の促進

語学イベント用ゲーム 担当者評価

「ヘッドバンズ」
学習効果 : ★★★★★
楽しさ : ★★★★★
使いやすさ : ★★★★★

「AGO」
学習効果 : ★★★★★
楽しさ : ★★★★★
使いやすさ : ★★★★★

「手作りカードゲーム」
学習効果 : ★★★★★
楽しさ : ★★★★★
使いやすさ : ★★★★★

発表ポスター・資料



20. 同志社大学

テーマ	ラーニング・アシスタントの文理の垣根を超えた協働と学習支援の取り組み・大学院生による学習相談を中心に	
発表代表者	趙 智英:同志社大学 学習支援・教育開発センター 助教	
連名発表者	磯川 雄大:同志社大学 大学院商学研究科 博士後期課程 3年生 藤田 萌々子:同志社大学 大学院文学研究科 博士後期課程 3年生 足立 莉子:同志社大学 大学院経済学研究科 博士後期課程 2年生 小林 裕:同志社大学 大学院生命医科学研究科 博士後期課程 2年生	
キーワード	学習支援	ラーニング・アシスタント
	プレFD	大学院生
発表の概要	同志社大学ラーニング・コモンズでは、文系・理系を問わず多様な専門分野の大学院生がラーニング・アシスタントとして学習支援に携わっている。ラーニング・アシスタントは、学生からのアカデミックスキルズに関する基礎的な相談に対応するだけでなく、自身の専門性を活かした高度な学習支援も担っている。このような取り組みは、学生の正課外学習成果の向上を図るだけでなく、大学院生にとっても教育者としての実践的な成長の機会となっている。また、文理を越えた協働体制により、相談する学生・支援を行う大学院生の双方にとって、学際的な環境が形成されつつある。本発表では、このような同志社大学ラーニング・コモンズでの学習支援の取り組みを、大学院生による学習相談対応を中心に報告する。	

ラーニング・アシスタントの文理の垣根を超えた協働と学習支援の取り組み ：大学院生による学習相談を中心に

趙 智英（同志社大学 学習支援・教育開発センター） 磯川 雄大（同志社大学 大学院 商学研究科）
藤田 萌々子（同志社大学 大学院 文学研究科） 足立 莉子（同志社大学 大学院 経済学研究科）
小林 裕（同志社大学 大学院 生命医科学研究科）

1. はじめに

同志社大学ラーニング・commons (LC) では、文系・理系を問わず多様な専門分野の大学院生がラーニング・アシスタント (LA) として学習支援に携わっている。LAは、学生からのアカデミックスキルに関する基礎的な相談に対応するだけでなく、自身の専門性を活かした高度な学習支援も担っている。このような取り組みは、学生の正課外学習成果の向上を図るだけでなく、大学院生にとっても教育者としての実践的な成長の機会となり得る。本発表では、同志社大学LCでの学習支援の取り組みを、LAによる学習相談対応を中心に紹介する。

2. ラーニング・commonsとラーニング・アシスタントの概要

ラーニング・commons (LC)

- ▶ 今出川 (文系中心)、京田辺 (理系中心) キャンパスに各々設置
- ▶ 学生の正課外学習を支える学習空間
- ▶ 仕切りのない、利用目的の異なる複数エリア



Fig.1 今出川キャンパス 良心館LC (同志社大学ラーニング・commons公式サイトより)

Fig.2 京田辺キャンパスラーネット記念図書館LC (同志社大学ラーニング・commons公式サイトより)

Fig.3 学習相談案内チラシ

- ▶ 自習スペースだけでなく学習相談ができる **アカデミックサポートエリア (ASA)**
⇒ 学習支援・教育開発センターの教職員とLAが対応
両校地合わせて延べ2,000人以上がASAで学習相談を利用 (2024年度実績)



ラーニング・アシスタント (LA)

- ▶ 大学での学びにおける基礎的な事柄から専門分野に関する学習相談対応、アカデミックスキル向上のための支援と学習環境の整備、維持を行う大学院生スタッフ
- ▶ 各研究科の博士前期課程、博士後期課程生で主に構成

よくある相談

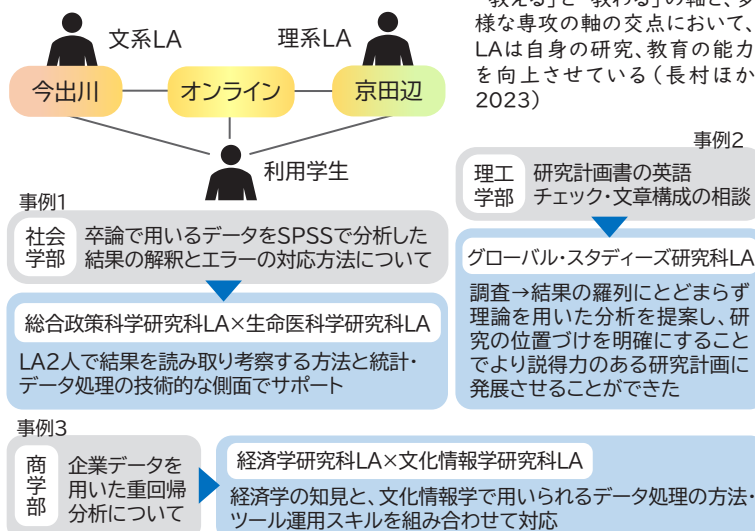
文章構成、メールの書き方、アイデアの壁打ち、先行研究の調べ方、プログラミング、数学、統計、外国語の勉強法、研究室選び、進路相談、ICT関係など



LC、ASAはハコ (ハードウェア)
LAはソフト面 (運営・支援体制) として学生をサポート!

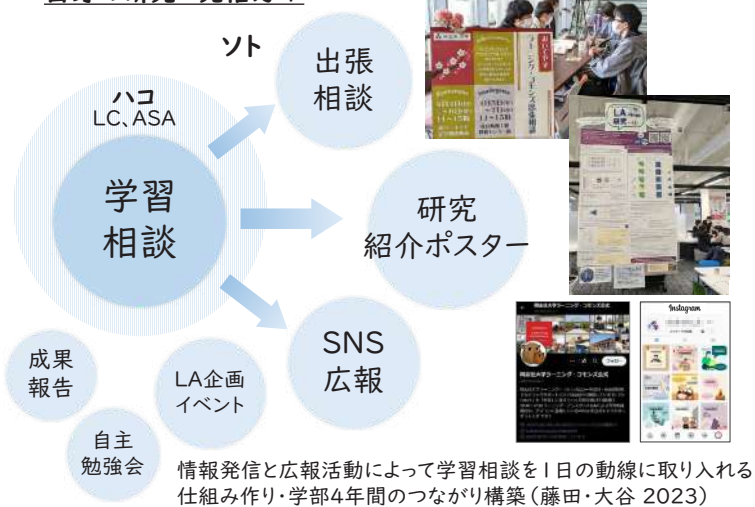
3. 文理を越えた協働

- ▶ 対面での相談とオンライン相談を併用
⇒ 文理を越えた協働体制により、利用学生とLA双方にとって学際的な環境を形成



4. ハコからソフトへ: 学習相談+@

- ▶ 傾聴、受け入れの姿勢から大学院生による創意工夫: 出張相談、研究紹介ポスター掲示、SNSを活用した広報活動
自身の研究+発信力↑



5. 今後の展望・課題

- ▶ BYODを前提とした学習環境の影響により、ICT関連の相談、学ぶためのインフラを整える段階での対応が必要
- ▶ 学習における生成AI利用の増加に伴い、AIリテラシー教育や適切な支援が必要 (大学生は生成AIを利用することによる独創性の欠如をあまり考慮していない可能性 (田口・田中 2025))

参考文献

田口聡志・田中希穂 (2025) 「生成AIに対する大学生の認知」『同志社教師教育研究』2, 同志社大学免許資格課程センター, pp.1-11
長村秀一ほか (2023) 「ラーニング・アシスタントでの学習支援と研究活動の相互作用: 「教える」「教わる」の観点から」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』14, 同志社大学学習支援・教育開発センター, pp.68-78
藤田萌々子・大谷紗也加 (2023) 「新たなつながりの構築へー今出川校地良心館ラーニング・commonsでの広報活動とInstagram運用」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』14, 同志社大学学習支援・教育開発センター, pp.86-96

21. 大谷大学

テーマ	大学生の思考力・表現力を高める言語技術オンラインプログラムの実践と課題	
発表代表者	筒井 洋一:大谷大学 非常勤講師	
連名発表者	北村 昌江:ランゲージ・アーツ研究&アカデミー 代表 出町 卓也:英国 East Anglia 大学大学院	
キーワード	日本人に適した言葉の技術の指導法	論理的・批判的思考力育成
	言語・非言語(ビジュアル)情報分析	自ら考え・判断し・行動する人づくり
発表の概要	<p>大学では、根拠を基にしたロジックや批判的思考力のための言語技術教育が一般的である。そのため、多くの学生は、大学の論理的思考やレポート作成、論文作成に自信が持てず、発表に対しても非常に消極的である。</p> <p>紹介する言葉技術トレーニングプログラムは、欧米諸国を日本人に合わせてプログラミングした。これを使って「2025 大谷大学『大学の学びを知る』の授業で、学生の思考力・表現力をどこまで向上させられるか挑戦した(15 週中 5 週間)。その中で学生は、言語技術の有用性にどこまで気づけたのか、学習活動にどれくらい活用できたのかを報告し、社会が求める自律した学生の育成に必須な言葉の力とは何か、海外の大学でも要求される批判的思考力の育成について発表する。と同時に、生じてきた課題についても論じる。当授業では、言語技術のメソッドのオンライン化についても実践を行った。</p>	

大学生の思考力・表現力を高める 言語技術オンラインプログラムの実践と課題

筒井洋一(大谷大学非常勤講師)、北村昌江(ランゲージ・アーツ研究 & アカデミー代表)、出町卓也(University of East Anglia 大学院生)



① はじめに

<仮説>

批判的思考力の基礎となる言語技術の問答法は、数回のトレーニングで活用できるようになるのか。

<提案>

ハイブリッド授業(対面とオンライン)による立体的授業への挑戦
(複数の講師と協力して授業展開するメリット・デメリット)



③実践：問答法トレーニングプログラム

- 1回目・オリエンテーションと自己紹介スキル
- 2回目・論理的思考の基本 事実と意見の区別
- 3回目・論理的な作文の基本 絵の分析
- 4回目・テキスト分析と多面的な見方・考え方
- 5回目・振り返り(相互評価や自己評価)



問答法による思考モデル

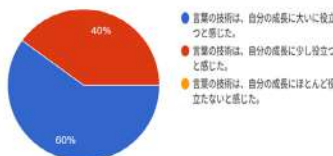
- 主張:** 私は、コンビニの24時間営業に反対です。
根拠: その理由は、2つあります。
第1は、夜中にコンビニで働くことは、安全な日本でも危険が伴うからです。例えば、強盗や暴力事件が挙げられます。
第2は、コンビニの店長を便利にする親会社の考え方があるからです。例えば、夜中の勤務を店長に押し付け、昼も店の責任者として働かせることが挙げられます。
再主張: だから、私は、コンビニの24時間営業に反対です。

⑤学生のアンケート結果とトレーニング課題

★言葉の技術の基礎である問答法を学んで根拠を基に考えられるようになりましたか？



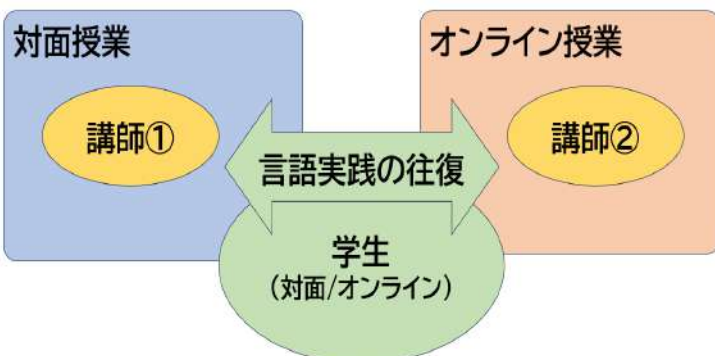
★言葉の技術は、あなたの成長に役立つと感じましたか？



<習熟結果とアンケート結果からの分析>

- *4回の問答法の指導でも、論理的文章能力の向上が見られ、活用できるようになった！
- *アンケートから問答法の意義が理解でき、意欲的に学ぶ学生の姿が伺えた！

⑦学習空間を拡張するハイブリッド授業の構造



参考文献:
 北村昌江(2025)「世界標準である言葉の技術『ランゲージ・アーツ』で未来を切り拓こう」北斗書房
 筒井洋一 他編著(2015)「GT(授業協力者)と共に創る劇場型授業—新たな協働空間は学生をどう変えるのか」東信堂

②批判的思考力の基礎となる問答法とは何か

問答法とは

欧米の国語教育 ランゲージ・アーツ(言語技術)の基本となる表現法で、「なぜ」を追求する論理的・批判的思考力の土台となる思考過程

「Language Arts(言葉の技術)」プログラムの全体像



基本の話型

主張+根拠+再主張

- <主張>** 私は、日本のアニメを研究したいと思っています。
<根拠> 何故かという、日本のアニメは世界的に若者の間で人気を集めているからです。
<再主張> だから、私は日本のアニメを研究したいと思っています。

④問答法の習熟結果

初回の記事

(自己紹介文作成時)

歴史学科 O君
 滋賀県出身 歴史学科 西洋史に興味があるのめっちゃ載りたい

歴史学科 I君
 僕は京都府出身で興味があることは好きなアーティストのライブに行きたいことです。最近挑戦したことは家に飼っている猫2匹を1人で洗うことです。1人で洗うことをできなかったけど爪切りは一人でできたのでちょっと嬉しかったです

哲学科 Kさん
 長野県上田市サマーウォーズ舞台歌い手好き、推しはまふまふさん 一人暮らし挑戦 楽観的なので大抵の事はどうにかかなと思ってます

授業終了時の文章

(興味を持った発表へのコメント)

主張なぜ競馬は人を魅了する力があるのかに私は興味を持ちました。
根拠なぜ興味を持ったかと言うと、自分が競馬について知らなかったため、魅了される理由を聞き、この理由なら自分も魅了されると感じた。
再主張私はこの発表を選びました。

主張私は「商品開発にAIを使用することは可能か」に興味を持った。
根拠なぜならば、傘や鉛筆と言った身近な商品が完成されているという視点で話していたからだ。新しい技術を使うことよりも、その商品は本当に必要か考える事が重要だと気づいた。
再主張だから私は「商品開発にAIを使用することは可能か」のテーマにした。

主張私が興味を持ったのは「なぜ競馬は人を魅了する力があるのか」です。
根拠理由は、競馬の世界を知らない私が、競馬の魅力やおススメポイントなどを知ることができ興味深く感じたからです。
再主張以上から私はこの発表に興味を持ちました。

⑥教室からオンラインへ広げる学習空間

<成功への鍵>

空間ごと(①教室・②オンライン)に配置された複数のファシリテーター
 →双方が独立して活動できる

実践1:①②別々にワーク→内容をシェア

実践2:講師の役割分担

- ②オンライン側:全体進行
- ①教室側:個々の学生対応



<今後の展開>

オンライン側の目を配置(ロボットやドローン等)
 →双方向の臨場感、学生と直接関われる

⑧総括

<仮説:検証結果>

- *問答法:4時間でも、繰り返し実践を重ねることで概ね活用可能
- *今後:情報伝達・情報分析の演習をスパイラルに学ぶ
 ... 論理的・批判的思考をより磨く

<提案:ハイブリッド授業>

- *メリット:学生の個別支援増、多方面からのアプローチ
- *デメリット:臨場感の共有
 ... オンライン側が操作できるロボやドローンなど「目」を配置

第31回FD・SDフォーラム企画検討委員会

- ★ 市川 寛 同志社大学 生命医科学部 医生命システム学科 教授
- ☆ 疋田 浩一 京都外国語大学 外国語学部 英米語学科 准教授
- 浅田 瞳 京都文教大学 臨床心理学部 臨床心理学科 准教授
- 井出 大地 京都文教大学 入学センター 高大連携オフィス 課長補佐
- 岩崎 大輔 京都薬科大学 一般教育分野 講師
- 奥畑 志帆 佛教大学 教育学部 教育学科 准教授
- 金子 貴昭 京都先端科学大学 人文学部 歴史文化学科 准教授
- 木村 修平 立命館大学 生命科学部 生命情報学科 教授
- 小正 浩徳 龍谷大学 心理学部 心理学科 准教授
- 佐藤 賢一 京都産業大学 教育支援研究開発センター長/生命科学部 教授
- 多田 泰紘 京都橘大学 経営学部 准教授
- 野村 実 大谷大学 社会学部 コミュニティデザイン学科 講師
- 前川 雄太 京都女子大学 大学運営本部 大学改革推進室 室長
- 南 了太 京都精華大学 国際文化学部 准教授
- 山本 康友 同志社女子大学 薬学部 医療薬学科 教授

★…委員長 ☆…副委員長

※氏名五十音順。所属・職位はいずれもフォーラム開催時のものです。

**第31回FD・SDフォーラム
報告集
2026年5月**

発行 公益財団法人大学コンソーシアム京都
〒600-8216
京都市下京区西洞院通塩小路下る キャンパスプラザ京都
TEL 075-353-9163 FAX 075-353-9101
URL <https://www.consortium.or.jp/>